

# 資料紹介

常民文化研究 第一卷(二〇二二)

## 『我田引水』

今井 雅之

吉田三郎・幻の農民文学

### 一 解題

本稿で紹介する資料、「我田引水」はアチックミュージアム同人、吉田三郎が執筆した小説の復刻版である。したがってそこに描かれている内容はフィクションであり、過去に生じた歴史的事実そのものではない。しかしながら、この小説で描かれている様々な出来事は、著者がアチック同人として書き遺した民俗記録の中にも散見されるため、その意味においてこれを実際に起きた出来事に基づいて創作された小説、いわゆる実録小説<sup>(1)</sup>として読むことができる。この解題では、本小説の読解に資すると思われる情報について紹介し、てゆくこととする。

#### 1 復刻の経緯

復刻版「我田引水」は、吉田家三代の手により八〇年の歳月を経

て完成された。書誌的にいえば、吉田三郎著、吉田総恵（長女）・吉田総耕（総恵長男）校註、今井雅之（本報告者）復刻・編集となる。まずは復刻に至るまでの経緯について記したい。

ことのはじまりは、神奈川大学国際常民文化研究機構の共同研究であった。二〇一五年から二〇一九年にかけて行われた「戦前の沢水産史研究室の活動に関する調査研究」において、報告者は吉田三郎について調査する機会を与えられた。この調査を通じて数多くの御親族からお話を伺い、またいろいろな未公開資料を御紹介いただいた<sup>(2)</sup>が、その過程でこの小説は発見された。この「我田引水」は、私家版ともいべき体裁をしており、雑誌を裁断・合本したうえで手作りの表紙がつけられていた（写真<sup>1</sup>）。またその本文には、吉田三郎の自身の手により無数の推敲もなされていた<sup>(3)</sup>。その後調査を進めていくなかでこの私家版は、一九四一年四月から一九四二年三月までの一年間、全十二回にわたり雑誌『博物』<sup>(4)</sup>に掲載された小説がもとになっていることが判明した。この雑誌は太平洋戦争中に

廃刊となっており、また管見の限り公的には国立国会図書館にしか現存していないため、今日では歴史に埋もれた存在となっていた。

新出資料を手にした報告者はさっそく読み始めたものの、正直なところ非常に難儀した。その理由は主に三つある。①手書きの推敲が多くスムーズに読み進められないこと。将来的には単行本化を目指していたのではないかと思われるほど、ほぼ全ページにわたり表現の修正が行われており、単純に読みづらい。②方言が強く意味がとれないこと。小説の中の会話部分は、舞台である秋田県男鹿地方の方言がそのまま口語体で記されており、これに慣れ親しんでいない者には理解できない箇所がある。③本小説の文学的・思想的な立ち位置がつかめないこと。あえて分類するならば農民文学に該当するものの、曰く言い難い違和感が拭えない。

こうした課題や疑問を解消するため、報告者は吉田三郎の御親族と協働して、①著者の推敲を反映した復刻、②方言部分の附註、③解題の検討をおこなった。特に②に際しては、三郎の長女にあたる総恵氏、孫にあたる総耕氏の全面的な協力を得た。またこれらの作業を通じて、作中に登場する地名が現実のそれと対応していることが判明したため、総恵氏の記憶も踏まえた舞台地図(写真2)を作成した。<sup>5)</sup>これらの作業は二〇一七年から二〇一九年にかけておこなわれ、復刻版「我田引水」は一応の完成をみた。完成後はこれを簡易製本し、御世話になった御親族の方々に手渡し、共に楽しんだ。

以上のような一連の過程を通じて「我田引水」の魅力を深く認識した報告者は、学会等でその存在を報告しながら、公にする機会を

探った。そうしたところ、様々なご縁に導かれ、このたび本雑誌『常民文化研究』に分割掲載いただけることとなった。ここに至るまでご尽力いただいた多くの方々に、心より感謝を申し上げる。

## 2 著者来歴

まず著者である吉田三郎の来歴について、小説に関連する事柄を中心に記す。なお、より広範な来歴および著者を取り巻く同時代的な背景については、先に述べた国際常民文化研究機構の共同研究で報告した拙稿「今井・2019」を参照いただければ幸いである。

吉田三郎は一九〇五年、秋田県南秋田郡脇本村字大倉(現男鹿市)に農家の三男として生まれた。家では水稲作、果樹栽培、菓子屋を複合的に営んでいたが、長男は体が弱く、次男は夭逝したため、農家の仕事はおのずと三郎に期待が寄せられることとなった。そのため十二歳頃からは本格的に家の仕事を手伝わされるようになった。吉田は農業そのものが嫌いなわけではなかったが、水引きと農耕馬の扱いには辛酸を嘗めさせられたようである。こうした水稲作に伴う苦しみを胸に、青年期の吉田は農業の合間を縫って勉学に励み、大正時代の新しい文化・価値観を吸収しながら、村を越えて活動の場を広げていった。当時の様子について、吉田は戦後次のように述懐している。

村においては、郵便局に勤めている有力な友人加藤君から協力して貰って青年啓蒙運動というよりも、村民啓蒙のために夏期大学を

開いた。東京から下中弥三郎氏、大西伍一氏、岡本利吉氏等自費でやってきてくれた。「中略」そのうちに農民組合運動が急激におこり、小作争議があっちこっちで始められた。東京で受けた講習の思想的見解の範囲内において私もその農民組合運動を是認し、そして時には応援にも出掛けた。消費組合運動と農民組合運動は当時の指導者たちは両立しないという見解を持っていた。私は当時まだそういう深い理論的な学問は身に着けていなかった。消費組合運動にしろ、農民組合運動にしろ、百姓が悲惨な状況から救われれば良いのである。ただそれだけで総べての革新運動を是認していた。「中略」私は当時、宗教的な立場と、アナキズムの立場と、そして石川理紀之助翁の老農主義的立場とを一連に結びつけて、なんら矛盾を感じなかった。しかし私はそれで終止符を打っていなかった。底抜け釣瓶桶で水ばかり汲んでもいけないし、たまには海水も組まねばならぬと思った。「中略」私の底抜け釣瓶桶は、かくしてマルクシズムの水を汲みだすことになった。〔吉田 1963: 50-51〕

斯くの如く広範な思索と活動を展開する中で、当時農村教育家として活動していた大西伍一に見いだされ、同氏の勧めにより男鹿の生活誌を記録することになる。これを波沢敏三が評価しアチックから出版することになり、以後アチック同人の一員となっていた。その後波沢に請われて一家で上京した吉田は、東京保谷の民族学博物館の管理人として民具整理や敷地内の維持管理に従事する。この間、アチック同人の一員として、たびたび『アチックマンズリー』

に寄稿したり、民族研究講座全課程を修了したりと、充実した日々を送ったようである。本稿で紹介する小説「我田引水」が執筆されたのもこの時期にあたる。その後、敗戦を機に郷里秋田へ戻り、自らの夢である共働農場の実現に向け、戦後開拓に従事した。

### 3 小説の舞台

本小説の舞台は大正時代の一農村。具体的に言えば、吉田三郎が生まれ育った秋田県脇本村である。この村の地理的・民俗的な概要については既に拙稿「今井・2020」で論じているため、ここでは描かれている時代について確認していきたい。

この小説で描かれている様々な事件は、誤解を恐れず言えば、大正時代に東北の片田舎で起きた些末な出来事に過ぎない。しかしながらその背後には、日本が近代化する過程で生じた様々な問題が影を落としているため、これらの時代背景を踏まえておくことは読み解くうえで意義あるものと考えられる。

まずは農業基盤の問題について。明治時代まで日本には多くの湿地が残っており、特に東北地方はその傾向が顕著であった。これらの湿地が明治後半から大正期にかけて乾田化されていった結果、近代短床犁による馬耕が可能になり、生産性が向上していくこととなる。しかしその一方で地域によっては、乾田化したことが原因で水不足がさらに深刻化するという問題も生じていた。その典型が本小説の舞台、脇本村である。水源を小規模な溜池のみに頼っていたこの村では、灌水（溜池）のインフラが整わないまま排水（乾田）の

インフラのみが整備されたため、システム全体としては非常に不安定な状態に陥っていた。本小説の最終章では溜池の新造が語られるが、その背景にはこうした問題が横たわっていたことになる。ちなみにこの新溜池が完成するのは、史実では一九三一年のことである。

続いて農民層分解の問題について。農民層分解とは、農村に商品経済が浸透するに伴い商品の生産力において格差が生じ、その結果として土地や生産手段を失い没落する農民（小作）と、これを集積して富裕化する農民（地主）に分かれていくことを指すが、明治から大正期の日本でもこれに類する事態が進行した。その結果、同じ村の中でも農民の間で権力の格差が増大し、弱者の側はこれに苦しむこととなった。これは同族結合の色が濃かった脇本村においても同様である。本小説の冒頭は、銀時計をちらつかせる「財産家の親方」に言い負けて田の水を分けてもらえない、「三しゅう」（主人公＝吉田三郎）の悲しみが描かれているが、こうした権力格差が生じた背景の一端に、農民層分解の影響があることを忘れてはならない。続いて米不足の問題について。第一次世界大戦の影響で好景氣を迎えた日本では、都市部の人口増加により米の需給バランスが崩れ次第に米価が上昇していくことになるが、これが決定的となったのが一九一八年のシベリア出兵であった。戦争特需の期待から投機目的で米価が高騰し、全国各地で米騒動も発生した。これを受けて政府は外国米を大量に輸入することとなるが、この影響は水田単作地帯である脇本村にも及んだ。本小説の中盤、とある事情により酒を購入する必要に駆られる「三しゅう」は、自宅の「米櫃の中からカ

ント米（外米）を三升程盗んでこれを米屋に持って行って賣り」、現金化するが、ここで売られた米が外国米であった。当時は農家ですら、いや農家だからこそ、国産米を満足に食べられない状況が発生していたのである。

続いて地方文化の衰退とその振興に関する問題について。当時は、大正デモクラシーの影響もあり、都市を中心に自由な若者文化が花開いたが、交通網・通信網の充実に伴い、地方にもその影響は少なからず波及した。一九一四年には吉田の村にも脇本駅が開業しており、人・物・情報の流通が加速した様子が窺える。その結果として地方の文化は古臭いものとみなされ、衰退の兆しが生じつつあった。しかし世の常として、こうした危機においては、古いものに対する価値が再発見・再創造されるということも往々にして起こりうる。郷土芸能という概念が発生したのがこの時期であることや、民俗学が形作られてくるのがこの時期であることからそれは示されよう。本作中では青年會が「作踊り振興策」について話し合う場面があるが、その背景にはこうした問題が存在していた。

最後に日本の南方進出に関する問題について。後の大東亜共栄圏構想に繋がる南方へのまなざしは既に明治の時代には胚胎していたが、第一次世界大戦後のベルサイユ条約を経て一九二二年から日本が南洋諸島（赤道以北の旧ドイツ領）を委任統治するようになること、これがさらに現実味を帯びるようになる。これに伴いメディアを通じて南洋ブームが演出されて国民に膾炙していくこととなるが、それは東北の農村も例外ではなかった。本作中では地域振興策の試み

として「假装懸賞踊り」が行われるが、そこで二等を獲得した仮装が「南洋土人」であったことから、こうした影響を窺うことができる。また作中末尾では県庁から来た役人により、「アメリカより拂日を食べた。南洋もそれに習ひ始めた」という問題が語られるが、その前提には、日本が国策として南洋諸島へも移民を送り出したという事実がある。すなわち、作られたイメージとしても、具体的な移住の地としても、南洋が一つの存在感を示していた時代、それが吉田の生まれ育った時代であった。

以上のような時代背景を踏まえると、本小説で描かれている様々な事件は、一九一六年から一九三一年までの間に吉田が経験した出来事が元になっていると推察できる（表1）。一九四一年、東京保谷に暮らす三十七歳の吉田は、若き日の郷里の思い出を振り返りながら、それらをひと夏の出来事として再構成したのである。

#### 4 構成と内容

本小説は主人公「三しゅう」の視点で物語が進行する一人称小説である。内容的には、田植えの時期に雨が降らず水引き争いが繰り広げられる第一章から第四章。村を挙げた雨乞いが行われ、大雨が降り、洪水になるまでの第五章から第八章。盆を迎えるにあたり作踊りがなされる第十章から第十一章。新貯水池完成に至るまでの顛末を描いた第十二章。大きく分けると以上の四部構成となっている。

本小説が初読で理解しづらい原因の一つはこの構成にある。上記の構成は我々が慣れ親しんだ起承転結の流れとは少し異なっており、

また芸能に代表される序破急や、映画に多く見られる三幕構成でもない。ゆえに全体像がわからないまま読み進めると、いったいどこに向かう話なのかわからなくなり戸惑うこととなる。本作のこうした特徴をもって、セオリーを無視したつまらない作品とみなすことも可能かもしれないが、報告者はこの構成こそが当時の農村の間感覚・季節感覚の直截な表現であったと考えたい。すなわち、農村の営みは起承転結で進行しないということである。

タイトルの「我田引水」にも表れているとおり、本作で描かれるのは水不足に悩む農民の生き様であるが、注目したいのは、この水不足という問題が開幕時点ですでに発生しているという点である。決して平和な暮らしの農村が前提としてあり、そこに突如として大事件が発生するわけではない。したがって物語が動き出す大事件の到来を今か今かと期待して読み進めても、それはいつまでも訪れない。つまり、農村の生活は始まりも終わりもなく、農村の問題はつねにすでに生じているのである。読者はこうした前提を説明されなままこの世界に投げ込まれるため、戸惑いながら物語を読み進めることとなる。

続いてこの水不足という問題がどのように解消されるかについてみていきたい。我々の慣れ親しんだ構成であれば、主人公が様々な困難を乗り越え、物語のクライマックスでついに問題が解決する、という流れで進むはずだが、そうはならない。本作では、様々なレベルで問題が解決されていくのである。まず、目の前の田んぼの水不足という点で見れば、物語も序盤の第一章で、主人公が他人の田

から水を盗んだ段階でひとまず解決する。タイトルの「我田引水」は一義的には第一章で達成されてしまうのである。続いて水不足に起因する村びと同士の諍いという問題は、第五章において、村を挙げての雨乞いがなされた時点で解決する。雨乞い後も雨はすぐには降らないにもかかわらず、諍い自体は発生しなくなるのである。雨乞いの社会的な機能がよく表れた場面だといえる。その後第七章に入るとついに大雨が降り、生業的にも水不足の問題は解決する。そして最終章では、水不足を解消するためのインフラ整備(溜池の新造)がなされ、ひとまず物語は幕を閉じる。しかしながら、物語の序盤で描写されるような、村びと間の権力格差といった社会構造の問題は維持されたままであり、今後も早魃になれば我田引水が繰り返される可能性は高い。以上のように、農村という世界では、つねにすでに問題が生じており、これは起きたそばから大小さまざまなレベルで解決されていく。しかしながら完全な解決には至らず、時が来ればまた同じ問題が形を変えて繰り返される。こうした営みがそのまま物語の構成に表れているため、直線的な物語展開に慣れ親しんでいる人間にとっては読みづらいものとなるのである。大事件はいつまでたっても到来せず、また大団円を迎えることもない。これが当時の農村の時間感覚・季節感覚ではなかったか。

本小说が戸惑いをもたらすもう一つの理由は、登場人物の配置の仕方にある。作中では様々な人物が登場するが、基本的にその場限りで退場し、再び登場することはない。その最たるものが、最終章で突如登場したかと思えば、あっさりと死んで退場する村びと、

耕三である。彼は貯水池の新造に伴う土木工事中に怪我をし、それが原因で死亡することとなるが、この間の描写は実に淡白で、読者に共感や感動を呼び起こすような仕掛けは皆無である。これをレトリックおよび構成の拙さと一蹴することもできようが、報告者はこれをある種のリアリズムとして評価したい。すなわち、当時の農村では死というものも身近で剥き出しの存在だったということである。それは万事において死が秘匿され、直視することなく生活できるようになった現代の我々には想像しにくい世界である。また、これは死に限られた話ではない。作中で起きる様々な事件、盗みや暴力や悪口はあまりにもあけすけで、社会的な配慮が欠如しており、法や倫理、規律といった概念が未だ十分に主体化されていない。舞台はたかだか百年前の日本であるが、そこには現代の我々とは別の人間が存在したのではないかと思わせるような描写が続く。こうした世界観を表現するうえで、淡々と登場しては退場していくという本作の人物配置の仕方は、ある意味で有効ではなかるうか。登場人物が使い捨てで、一人一人の人間の掘り下げが足りない、という批判はもっともである一方で、こうした批判には近代的なヒューマニズムが無意識に前提されていることにも自覚的にならねばならない。

以上のような理由から、決して読みやすい類の小説とは言えないが、こうした違和感、戸惑いをもたらす構成そのものにも本小说の価値があると、報告者は考える。

## 5 文学的立場

本小説は広義の農民文学に位置付けられるが、その中でも特異な位置を占めている。最後にこの点について、同時代的な文学史を踏まえながら論じておきたい。

吉田三郎が青年期を過ごした時代は、広義の農民文学が隆盛した時代にあたる。当時の文学史をどのように整理するかはそれ自体が難しい問題であるが、おおよそとしては、明治末から大正期にかけて自然主義文学の中で農民を描いたものが生まれ、ロシアからはアナキズム思想が輸入されて思想的な下地が作られ、大正末期から昭和初期になるとプロレタリア文学が台頭し、そしてこれに対抗するように狭義の農民文学が自覚的に書かれるようになる、という流れで整理できる。現代ではこれらの違いはあまり意識されないが、当時はそれぞれがイデオロギー<sup>(7)</sup>を掲げて相互批判していたことをおさえておく必要がある。もちろん実態としてはそれぞれが明確に分離独立していたわけではなく、時に接近、融合しながら混沌たる思想状況が展開していたわけであるが、本報告では当時に倣い次の四つの立場に分けて整理することとする。①ブルジョア民主主義に立脚した近代文学、②無政府主義に立脚したアナキズム文学、③マルクス主義に立脚したプロレタリア文学、④農本主義に立脚した狭義の農民文学。本報告で取り上げる吉田三郎の「我田引水」はこのいずれにも属さなかった点が重要であるが、思想的には④農本主義に立脚した狭義の農民文学と親和性があるため、まずはこの立場が他の

文学をどのように位置づけていたかを確認しておく。そのうえで吉田の小説と④狭義の農民文学との差異を論ずることとしたい。

④の代表として挙げられるのは、一九二四年に発足した農民文学研究会であろう。その中心人物の一人である大田卯に即してその主張を整理すると、まず①の近代文学に対しては、「如何に農民を描いてあつてもその作家がブルジョワ・イデオロギーに立脚しているならば、私達はそれをブルジョワ芸術と呼ぶ<sup>(8)</sup>」とし、来るべき農民芸術は「土といふものを基調にした社会のイデオロギー<sup>(9)</sup>」に立脚したものでなければならぬと批判していた。つまり、農民文学を含む農民芸術は、「土」すなわち無産農民階級の意識・体験から出発しなければならぬと考えられたのである。続いて②のアナキズム文学に対しては、「アナキズム・イデオロギーは云ふまでもなく、個人の自由（やがてそれが社会の自由といふことに転化する）平等、相互扶助等々であり、何処に階級的基礎を、経済的基礎を、現実的な実践運動の人的基礎を求めていゝか甚だ漠然としている<sup>(10)</sup>」とし、農民イデオロギーに基づく農民文学はこれらの基礎が明確であるため、アナキズムのそれよりも「一歩も二歩も現実に時代的に前進、発展したものである<sup>(11)</sup>」と位置付けていた。最後に③のプロレタリア文学に対しては、その根拠となるマルクス主義が都市中心の論理であるとして次のように説く。「我々が農村と都会の対立を問題にする時は、その機構を中心とする。原則的として都市機構は、農村搾取の上でなければ成形し得ないものである。（中略）都市という膨大なだにを養ふべく、農村は骨と皮ばかりにならなければならぬ

い。資本主義の組織は、とかく農村を強制する。資本主義の延長でしかないマルクス主義もまた然りである<sup>(12)</sup>。こうしたイデオロギーに基づいて書かれるプロレタリア文学は往々にして、「農村の客観性などにはお構いなしに、いきなりそこへ指導者がやつて来て——中央から天下るのである——そして小作争議をおつづけ始める。演説会をやつて要求書を叩きつけて、それで苦もなく勝つ<sup>(13)</sup>」という公式を適用した政策的文芸作品に墮していると批判する。

以上が犬田卯に即して見た場合の農民文学の立場である。農民文学研究会それ自体も一枚岩ではないが、中心的な考えはこのようなものであった。改めて④の立場を一言でいうならば、農民としてのイデオロギーを確立し、農民自身の手によって世界を変革していくこととする思想を文学の形で表現したものが、狭義の農民文学であったといえる。いずれにせよ、当時の左翼的な文学が政治思想と密接に結びついていたことをここでは確認しておきたい。

これらを踏まえた時、「我田引水」は文学としてどのような位置づけられるか。本小説の作者は農民でアチック同人でもあった吉田三郎である。執筆当時は東京で博物館の管理人として研究者とともに過ごしており、表面上は都会のインテリに近いところにもいたが、自己意識としてはあくまでも「もの言う百姓」であり、その意識は作品にもにじみ出ている。百姓にしかわからない生々しい感覚・世界観が描かれているという意味では「土といふものを基調にした社会のイデオロギー」に立脚した作品であり、④農本主義に立脚した狭義の農民文学に近いところにあるといえる。しかしながら、吉田

の農民イデオロギーは終始身近な実践に結びつくばかりで、大きな政治変革や農民運動の根拠となることはない。つまり、農村の権力構造や農村の疲弊といった問題が間接的に書き込まれるものの、登場人物はそれを政治的・思想的な運動を通じて解決しようとはしない。あくまでも百姓的な小さな実践を通じてなんとかやり過ごしていこうとするのである。これはプロレタリア文学の立場からすれば、階級闘争の問題を矮小化してしまっているため話にならず、狭義の農民文学の立場からは、「批判のない現実直写は、単なる事実の記録を作製することであって、真の芸術を創るゆえんではない<sup>(14)</sup>」という批判がなされるであろう。かくしてこの「我田引水」はこれらのいずれの立場からも評価されず、歴史に埋もれ、幻の小説となった。

同時代的な状況を加味するならば、本小説が執筆された一九四一年は、治安維持法が改正された年であり、当時は既に左翼的な文学運動が国家権力により抑圧されていた時代であったことも考慮する必要がある。プロレタリア文学の思想的な根拠となるマルクス主義の弾圧は学問にまで及んでおり、農民文学の背景にある農本主義は一部を除いて戦時体制下の国体イデオロギーに接近していた。こうした状況下にあつては政治的・思想的イデオロギーの強い小説を書くことが憚られたのも確かである。しかしながら、ならば吉田はやむなくこのような小説を書いたのかといえば、おそらくそうではない。終わりなく続く様々な問題を乗り越えながら生きてきた一人の百姓として、大きな物語には回収されない、されるべきではない日



常があることを直截に伝えようとした結果、この物語は生まれたと考えるのが妥当であろう。そしてその背景には、渋沢敬三率いるアチック・ミュージアムのまなざしが大きな影響を及ぼしていることは言うまでもない。

以上、本小説の読解に資すると思われる情報を簡潔に整理してきたが、執筆の動機や思想的な影響関係については未だ明らかになっていない点も多い。解題としては不十分でありながらも世に問うこととしたのは、ひとえに本小説そのものの面白さを広く共有したいと考えたためである。読者諸氏のご見識を賜りたい。

## 注

- (1) 吉田三郎自身は本小説を「実録物」と表現している。「私は昭和十五年に、「我田引水」という実録物を「博物」という歌誌の附録として二カ年連載した事がある。これは私の体験した大正年代の我田引水に関する悲喜こもごもの話を書いたものである」〔吉田 一九七七 一七一〕
- (2) 本資料の所蔵者は吉田三郎の次女・八重子の夫にあたる中道琢郎氏であった。中道氏は義父の三郎について詳しくご存じであり、三郎の蔵書も保存していた。調査に際しては度々有意義なお話を伺い、また現地をご案内いただいた。心より感謝を申し上げます。
- (3) この推敲が吉田三郎のものであることは次の二点により疑いのないものとなっている。一つ、三郎の蔵書の中から発見されたこと。一つ、筆跡が父のものであると総恵氏が確信していること。

(4) 雑誌『博物』は歌集で、その編集者はアチック関連の出版にも深く関わった高木一夫である。吉田の小説は、この短歌雑誌の巻末に「附録」として掲載された。掲載の経緯は明示されていないが、アチック経由で高木との繋がりがあったことは十分に考え得る。また、本雑誌には三郎の弟である、吉田四郎が常連歌人として投稿していることから、こちらの方面でも口利きがあった可能性がある。

(5) 地図の作成に際しては、現存する最古の航空写真である国土地理院 JTR873B 船川地区 CA6（一九四九年 米軍撮影）を下敷きにしつつ、複数の御親族に聞き書きをおこなった。また、ご高齢で現地を共に歩くことが難しい総恵氏には、グーグルマップを活用しながらバーチャル上で郷里をご案内いただき、幼少期の思い出を伺った。

(6) 当時は農耕馬を馬喰から購入していたが、この当たりはずれによっては家計が大きく傾くことがあった。総恵氏によれば、吉田家は農耕馬に関してはことごとくはずれを引き、思い通りに働いてくれず苦労したという。

(7) ここでいう「イデオロギー」に否定的なニュアンスはない。当時におけるイデオロギーは、自らの階級的立場を自覚し、世界を変革するために確立すべき世界観のことを指しており、肯定的なニュアンスの用語として使われていた。

- (8) 〔犬田 一九五八 三三三〕
- (9) 〔犬田 一九五八 三三三〕
- (10) 〔犬田 一九五八 一三六〕
- (11) 〔犬田 一九五八 一三六〕
- (12) 〔犬田 一九五八 一一八〕

- (13)〔犬田 一九五八 一一九〕  
 (14)〔犬田 一九八五 七九〕

参考文献

犬田卯著・小田切秀雄編

1958『日本農民文学史』農山漁村文化協会

犬田卯

1985『農民文芸三講 ふるさと文庫』筑波書林

今井雅之

2019「戦前の地方農村青年をとりまく思想的・社会的状況について」

『国際常民文化研究叢書十三―戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究―』神奈川大学国際常民文化研究機構

今井雅之

2020「吉田三郎の著作にみる溜池灌漑」『東北民俗』第五四輯 東北民俗の会

吉田三郎

1963『もの言う百姓』慶友社

吉田三郎

1977『男鹿のこぼれだね』秋田文化出版社

二 復刻に際して——吉田三郎と甘いもの——

吉田 総耕

吉田三郎は、お酒よりもお菓子が好きだった。

本著では、用水路の番人を酒で調略しようとする話が出てくるが、本人は酒が苦手だった。晩酌もしなかった。

その代わり、大の甘いもの好きだった。もらいものをしたお菓子を大事に大事に、もったいながって食べないうちに腐らせることがよくあった。

本著の舞台である大正時代の東北の農村には、甘いものと言えば黒砂糖ぐらいで、本著に登場する小豆餅にも、ちよっぴり甘いだけのツブシ小豆に、不満たらたらの様子が書かれている。甘いもの好きは、吉田三郎に限ったことではなかったのかも知れない。

時代が下って昭和に書かれた『農民日録』には、ほとんど毎日のように甘納豆、飴、煎餅、キャンディなど、様々なお菓子が登場する。決して高い茶菓子などではなく、安い駄菓子の類であったが、好んで食べている。昔から、祖父はお菓子が好きだったんだと、妙に感心した。

私は三郎の二人の娘のうち、長女・総恵の長男として生まれた。

三郎には男子がいなかったもので、待望の男の子だった。まるで自分の子のように喜んだという。私が産まれて間もなく父は三郎の元を

去り、後を追った母と私は秋田市内に居住することになったが、私だけはそんなわけで、小学校に通うまでほとんど三郎の家で育った。今も、三郎の畑で遊んだ鮮明な記憶がある。

夏の暑い盛りの畑仕事、汗びっしょりで麦を刈り取っていた。いつもそんな時分に、キャンディ売りがやってくる。ラッパを鳴らし、リヤカーに大きなブリキ缶を二つほど載せて、中には色とりどりのこけし型のキャンディがいっぱい入っている。原材料は砂糖水でなくサッカリンの、ちょっと苦い甘さで、一本二十円とかの安いものを買ってくれるのが楽しみだった。冷たくて苦甘くて美味しかった。

三郎は、グミ酒（焼酎にグミの実を漬けたもの）を手作りして、チヨビチヨビ飲んでいた。他に冬期は麴から甘酒を作って飲んでいたが、お酒はそんな程度だった。

吉田三郎の三度の食事は、質素だった。白米と、季節の野菜が具沢山に入った味噌汁、漬物、塩漬けのニシンやホッケの焼き魚、煮物、和え物など。それをいかにも美味しくそうに食べ合わせる。

学生になって、他県に行って驚いたのはそのことだ。おかずを単品ごとに食べて、いろいろなおかずを食べ合わせるものない、その食べ方。今では当たり前に見えるが、吉田三郎は様々なおかずを口の中で混ぜ合わせて、味のハーモニーを美味しいと感じているところがあつた。それが実に美味しく見えるのだ。子供のころ私も、よく真似をして食べた。

ご飯を口にした後、漬物、炒め物、味噌汁を次から次と口にして、口の中で一緒に噛み混ぜる。三郎の順番通りに口にして、同じように食べてみたことを覚えている。

子供時代は、季節ごとに毎日塩ホッケ毎日身欠きニシンの日があり、すっかり飽きてしまったのに、今この歳になって再び食べたくなるのだ。懐かしさだけではなく、あの味が忘れられなく美味しく感じるから不思議である。

大晦日とお盆だけは、豪華な行事食が作られる。特に年越し用のお吸い物は、飼っていた鶏をつぶした肉やガラでだしを取り、濃い目のしょうゆ味の汁に、櫛のように包丁を入れたコンニャクと豆腐、それに細長く縦に千切りした長ネギを浮かべた簡単なものだが、私の大の好物だった。豆腐や油揚げは自家製造していなかったから、貴重で高価な食材だったのだ。

吉田三郎が耕した畑も住まいも今はない。不肖の孫の私が始めた事業の整理のために、売却して失った。三郎の財産と呼べるものはなくなってしまった代りに、残されたその著書に多くの研究者が価値を認め今も光を当ててくれていることは、私には救いのような気がして安堵している。

この度も、若き研究者の今井氏の度重なる訪問と現地踏査、努力によって本著が発行されることに、私も母も心の底から感謝する次第である。

## 《凡例》

- ・本書は吉田三郎著「我田引水」に校註を施し、関係資料を加えて復刻したものである。
- ・「我田引水」は、一九四一年四月から一九四二年三月にかけて、全十二回にわたり雑誌『博物』に掲載された小説である。
- ・復刻にあたっては、底本として中道琢郎氏（著者の次女の夫）が保管するもの（以下「私家版」と呼ぶ）を使用した。
- ・「私家版」は、著者が生前に全十二回の連載をスクラップして一冊のノートにまとめ、自ら装丁を施したものである。この「私家版」には、著者自身の手によって手書きで加筆・修正が行なわれている。
- ・復刻にあたり、著者の子孫である吉田総恵氏（著者の長女）、吉田総耕氏（著者の孫）とともに内容を検討し、必要と判断される語句については新たに註を附した。
- ・著者の加筆・修正部分については以下のように処理した。
  - (1) 誤字の訂正や表現の修正を意図したものについては、著者の意を汲みその通りに修正した。
  - (2) 語句の註釈を意図したものについては、
    - ①フリガナの位置に追記されたものについては、同じ位置にカッコ書きで記した。
    - ②文末に追記されたものについては、カッコ書きで記した上でゴシック体とした。
- ・その他誤字であることが明確なものについては、著者の子孫と協議し

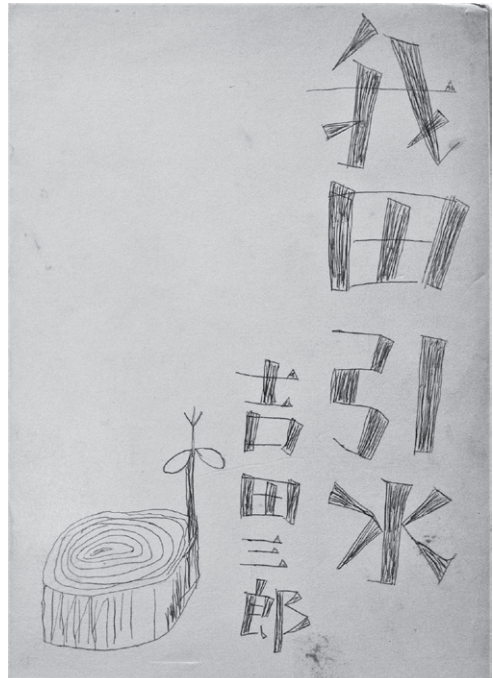


写真1 「我田引水（私家版）」表紙

たうえて校訂した。ただし著者独自の語法・表記である可能性が残るものについては手を加えていない。

・本文中には現代の価値観からすると不適切な表現が含まれているが、歴史資料としての価値を重視し修正していない。

・附録の舞台地図は、一九四九年に米軍が撮影した空撮写真（国土地理院 UR2873B 船川地区 CA6）をもとに、報告者が著者親族からの聞き書きを踏まえて作成した。



写真 2 舞台地図 (国土地理院の写真を基に報告者作成) ( ) 内は小説内での呼称

表1 関連年表(吉田1977『男鹿のこぼれだね』を基に報告者作成)

西暦	年齢	吉田三郎年譜(生誕から帰郷するまで)	同時代史
1905年	1	秋田県南秋田郡脇本村に農家の三男として生誕	
1906年	2		
1907年	3		米穀検査制度確立
1908年	4		水利組合法分布
1909年	5		耕地整理法改正
1910年	6		柳田國男『時代ト農政』
1911年	7		
1912年	8		
1913年	9		
1914年	10	父母分家、脇本駅開業	第一次世界大戦
1915年	11		
1916年	12	農繁期には学校を休み手伝う	
1917年	13		ロシア革命
1918年	14		シベリア出兵、外米の増加
1919年	15		ベルサイユ講和条約調印
1920年	16	脇本尋常高等小学校高等科二年卒業	国際連盟発足
1921年	17		アチックミュージアム誕生
1922年	18	台島大謀網漁に従事	日本農民組合結成
1923年	19	脇本実業補習学校卒業	関東大震災
1924年	20		農民文芸会結成
1925年	21	鈴木木人の「兄弟愛農場」を訪問	治安維持法、普通選挙法公布
1926年	22	大西伍一他による「農民自治会」の夏期講習に参加	農民文芸会『農民文芸十六講』
1927年	23	岡本利吉の「農村吉年共働学校」へ入学	金融恐慌
1928年	24	マルクス学に触れ、小作争議に参加	三・一五事件
1929年	25	半促成蔬菜栽培を学ぶ	柳田國男『都市と農村』
1930年	26	裏山で山居生活開始	昭和農業恐慌
1931年	27	新貯水池の築造	満州事変
1932年	28	大西伍一來村、男鹿の民俗について話す	
1933年	29		日本資本主義論争
1934年	30	渋沢敬三、石黒忠篤ほか7名來村	日本民族学会設立
1935年	31	『男鹿寒風山麓農民手記』出版	
1936年	32	『男鹿寒風山麓農民日録』脱稿	コム・アカデミー事件
1937年	33	民族学博物館管理人として保谷村へ移住	日中戦争、人民戦線事件
1938年	34	『男鹿寒風山麓農民日録』出版	国家総動員法成立
1939年	35		保谷民族学博物館開館
1940年	36		
1941年	37	『我田引水』執筆	太平洋戦争、治安維持法改正
1942年	38		
1943年	39		
1944年	40	民族研究講座全課程を修了	
1945年	41	敗戦を機に帰郷、秋田県天王村に入植	

## 我田引水

### 第一章

#### 一

全くふらふらになるまで疲れ切つた肉體と共にややもするとその心までも倒れさうになるのだが、然しこゝで倒れてをられようか。

たとへ一滴の水でも良い、それに依つて一株の稲でも良いから實らせねばならぬ。こゝが吾々の生死の別れ道だと、自分で自分の心のだるみの籬をしめ直すこと幾度ぞ。今日もその手で更らに一籬しめてううんと溜息ついて私は田圃に出た。あゝ平素何んとも思はぬこの鍬も晴天一日毎に重味を覚え、唯一の道具でありながらも妙に嫌になつて來るのであつた。

かうして私は番水を貰ひに毘沙門田にたどりついた。午前六時にはもう次ぎの番の人に渡されることになつてゐた。私が前番の人の田の水口に立つている姿を見たのであらう源の方から、

「やあまだ早いで、水口に鍬をたてゝはならぬでい」<sup>(1)</sup>

と、大きい聲で怒鳴つてきた。金三親方である。私は走つてくるかと思つてたが、極めてゆつくり、水路の邪魔物を除きながらこちらへやつてきた。

「親方、もう六時だべ、俺ら水口を切つて水を持って行くでい」

と私は言つた。

「何んだと、んが(女)の時計は腹時計で、腹に慾のあるふ

い、<sup>(2)</sup>の時計はなとでも直ぼされら、俺ら時計は銀側の時計で機械だ、まだ五時半だ、まだ三十分はいでこら見れじや」

と、金三は私を壓伏するような權幕でシャツのポケットから時計を取り出して迫つてきた。私は弱年だし、金三は四十四五にもなる、そして私の村でも上位の方の財産家の親方だ。しかし負けてはゐられない。

「親方、何んだとげそんだら事位いは知つてゐるでば人の腹こそ正直で、胡魔化されるもんか。毎年今頃の六時頃には、東から出て來る朝日が、こごがら見で恰度村のお宮の杉の木の上に出でそいがらこのあだりの田に日があだるのだよ。其の時こそあさまの六時頃だ。そいで番水は渡し、渡されたものだ、そいがここの番水の昔からのきめがだだと俺らのぢつちやがおひでだけだ」<sup>(4)</sup>

と私は主張した。處が金三は

「なんだと、この青二才め、生意氣ごどゆひがて穀物検査所の支所長がら、精勤で貰つたこの銀時計が時間が合わねごとがあるものが」

と、持つてゐた鍬で畔を二つ三つ叩いた。

「したつて親方、時計は人間が作つた機械だ、その螺旋をふつこ抜えて、針を廻ひば三十分や一時間は何んとでもなるべひい。公職にある人だ、そんなこと言はねでさあ分けでけれじや」

と、私は昂奮して言つた。そしたら、平素でも出眼で三角で凄い目付のこの金三は、更らに目を三角にし、額に幾本もの皺をよせておこつてきた。

「んがより年いた人をちよしまし(からかふ)も程がある。そんならでほげな口をきいで、あとにさあしまたと思ふなよ、そんな水さつさと持つていげ」

と、言つて金三は歸つた。然しこんな喧嘩してゐる内に三十分は經つてゐた。結果に於て私はこの親方のために敗北したのであつた。かうしてやつと望みの水は吾が田に入れることが出来た。そしてほつと安心して畔の上に立つて吾が田を見る時、またもとの不安が幾倍にもなつてゐることを意識するのであつた。一昨日より昨日、昨日より今日と田面の龜裂は多くなり、稲の葉が黄紅くなるのが目立つてくるのであつた。さうした田には幾等水を入れても目に見える程の効果はなかつた。だからかうなると少しでも水のある田へ全力を注いで水を入れるより外なかつた。それでもこの細い水量よりも一日の日光で乾く量が多いから立つても坐はつても居られないのであつた。絶えず水の出でくる山の源まで行つたり歸つたり、そして少しでも水のとどこうてゐる處がありはしまいかと注意して歩くのであつた。かうして歩いたからとて水は別に多く流れ出て来る譯でもないし、また日日に水も段々と流れ出る量が不足になるばかりであるといふ事は、充分理解出来てゐながら矢張り走り廻らねばならぬ程變態的になつてゐるのであつた。かうして苦しめば苦しむ程、この水に就いて色々な不合理な事を思ひ出されて一人腹を立て憤激するのであつた。

尤もこの水はあの金三家の山林から流れ出てはゐるが、然し流れ出す水は地主のものでないと聞いてゐる。それなのに何故あの家の

前にある貯水池を修理して水を貯めるようなことをせぬのだらう。金三の家の前には相當に廣い貯水池がある。それを少し金と勞力をかけて修理すれば完全に貯水が出来て、同じ苦んでもその苦しみ方が樂だのに、然し地主は修理する氣はなかつた。假令早魃にあつて小作人が不作を蒙つても小作米は少しも負けずに済む時代であつた。だから地主が小作人を思つて進んで修理するなんてことは絶対無かつたし、また小作人が五人三人共に行つて願へば却つて田を取り上げるぞと、おどされて逃げ歸るのが常道だつた。かういふ時代なるが故に、金三親方もその貯水池を出来るだけ永久に修理しまいと考へてゐた。この貯水池を修理することにでもなれば、當然役場にある圖面を基調にして、計上されてある面積だけを完全に修理することになるのが當然である。さうなると、この金三親方の宅地の半分が貯水池になつて、そのため吾々小作人は水引きの苦勞が減じるが、それだけ金三の宅地は減らされねばならぬ實情にあるのであつた。然も現在その荒地の中に特に小さい池を作り、その池まで自分の池だと頑張り、そして水を満々とたたえてゐるのであつた。それでも、これを見て誰一人文句を言ふ人が無かつた。それかと云つて、弱年の私も矢張りその例に漏れず、金三親方の眼が恐はかつた。

その日もまた馬鹿に暑く、田面の水が無くなるのが上方から一寸また二寸更らに三寸と、水の移動がはつきり解る程だつた。何んとも出来ないこの現象を凝つと見てゐた私は目がくらみかかつてきた。そして泥田に倒れさうになつたので、私はこれではならんと、また心の箍をしめ直す。そして少し休もうと木の下に行つて腰を下した。



それからどうなつたか知らずに目を覚まして見たら日は西に傾き、確か午後三時頃であつたらう。はつと思つて、今から晝飯でもない、と、先づ田の畔を渡り水を入れてある田を見た。そして驚いた。如何に細い水量とこの天候とは申せ、私が其處の木の所で休すむ前とは全く田面は變つてゐた。水は流れてはゐたが既にその田の水は乾いてゐたのであつた。私はこれまでの経験からしても、こんなに早く水が無くなるといふことは何んと考へても合點がゆかなかつた。私はぼかんとして田面を凝めた。その時、私の後からどかどかやつてきた者がゐた。私ははつと思つて後を見たら、今朝嘩喧した金三親方であつた。矢張り今朝の様な顔をして私の前で止まり、鋤をどかつと下してから、

「この野郎何處までも太てい事をやりがる、何にしに俺れ家の池の水まで拂つてけやがて田に掛けやがた。池に放してある鯉もみな何處かい下つてしまつた。ただにして置がれねどさあ俺れの家まで<sup>(5)</sup>」

と、やや聲を大きくして怒なりつけた。この一言を聞いた時の私の全身は確かに血の波打つ音で瞬間呆然とした。

「何んだと、俺ら知らねよ、そんなこと、誰れがそんな水を盗む馬鹿があるもんか。一體その池の水が一滴だて俺ら田に入つた様子がないでないが。むしろ今、却つて俺ら田に入つた水が不足だと不思議にしてゐる處だ。俺ら十一時頃から今までの木の下で寝てしまつたのだよ、そんな性骨<sup>(6)</sup>の悪いことはしねでくれ。あんなに親方家の田に水があるのに、そんなにこの年の若い俺れをいじめね

でも良いでねいが」

と言つたらまた金三は、

「したたて、<sup>(6)</sup>このがぎ、ちよう(今日)このあたりで水ふぎ<sup>(7)</sup>してゐるのは、<sup>(8)</sup>んがばかりだべ。あと誰が居ただが、とぼけやがて、年もゆかぬ癖にこんな盗するも程がある。先づ池を見るにあべ、この餓鬼、ただにして置がねがら」

と私の半袖をぎゆつと引張つた。私は決して行くまいと横になり、兩足に力を入れて突張つた。金三は引張ることを止めた。

「んが、どこまでもゆがねのが、<sup>(8)</sup>そいではこれが六時迄の水を池の中に入れてやるがらさう思ひ」と言つて金三は歸つた。

「糞を喰へ、勝手に定めやがて、あの水を一度に急に流ひば水路の側の草が相當倒れるし、また俺ら田の稻だつて下方へなびき倒れる筈でねいが、そいがら鯉だつて下つたとすれば、俺ら田に泳いである筈でねいが、<sup>(9)</sup>いい、親方無實の罪をきひるもんでねいで、まじ俺いの田を見でくれ」

と私は後から叫びかけた。けれどもこの金三親方は二度と見向もしないで、さつさと歸り、そして私は全く不安心な氣持で、今金三が言つた通り、水をあの池に入れないでくれれば良いと念じて目を金三の後姿から離さずにゐた。けれども天は、否神は、否金三は無情である。矢張り金三は力一ぱい鋤を振りあげて泥土を運び、所謂水も漏らさぬ程かたく止めてしまつた。それを見た私は全く何うすることも出来なかつた。それかと言つて金三と組打ち喧嘩するにはまだまだ私は肉體的にもまた背景となるべき經濟的にも、總じて餘

りにも弱過ぎてゐることを知つてゐた。私はただ無暗矢鱈にその無限の恨みを鍬で持つて田の土堤を切りつくしより外になかつたのである。學校で正直は一生の寶と教へられた私共が、今かうして大人の世界に飛び込んでこんなにもまざまざと正直は貧乏の神で不正直が一生の寶なることを見せつけられたのはこれが始めてであつた。私は心の中で何んなに泣いたか知らぬ。これから歸つて、家内一同から、水は掛かつたか、と問はれるのがまた身が切られる程辛い。ああ水引は嫌だ。百姓は嫌だ。何故私は小學校を卒はる時父の勧めに従つて鐵道員にならなかつたのか、外で見えてゐる百姓は自然を相手に心ゆくまで鍬鎌を振廻して働くそれがたまらなく楽しいものに見えるのだ。父の勧めを振り切つて斷然百姓になつた私は眞に間違つた道を踏んだと後悔しながら蹠跟と家に入つた。

## 二一

父は水が不足で田の草取りが出来ないとて、早く戻つて来て馬の草を切つてゐたが、私を見るとすぐ、

「んがひばどうして寒風山(9)に日も落つねで、番水を渡してきたて、ひば何んと馬鹿な子だ」と言つた。

其處で私は今日の一切の出來事を詳しく父に言つた。

「ううんあのやつこ、ほんとにきまげ、(肝がやける)で、きまげるで」

と、たつたこれだけ言つて黙つてしまつた。それから

「んが、早く飯食つて今夜また三本松田に水引きにいげよ」

と私に命じた。私はこの時急に父の命令に従ふのが嫌になつた。

「おら、んかじや」

「何にこの畜生、誰れのお蔭で大きくなつた。飯を食はひで置けば良い氣になつて、飯を食ふのがんかが(嫌なら)、何處さでも行きやがれ」

然し私は矢張り何虎へも出る勇氣もなし、結局あきらめて其の夜また出る事に決めた。そして黙つて妹の作つた夕飯を食つてゐた。

其處へ母が顔まで泥を被つて田から歸つてきた。そして矢張り私の早く歸つたことを父に尋ねてゐるらしかつた。父は母に言つた。

「あの金三のやつこめ、こどらだと思つて人馬鹿にして番水まで掛けらひね工夫してゐるがら、どばらくそ悪くて俺ら腹たて仕様ね。ううん、あの時、あの餓鬼(私の妹を指し)病院に入つて腹手術しねがつたり、まだあの日松の馬喰が俺れどご詐欺(10)ねば、何に、無盡など企てる必要もながつたが、あの無盡一つ企てるどて、あの金三やつこに頭を下げて、人を世話して貰つたそれを恩にきひて、何處までも俺れをいじめる心算だべ。一旦貰つた宅地もあのやつこはまつてその一部を本家に戻ひでて、俺ら全く泣ぐよりほがね。ああなさげねで。なさげねで。」

父はしんみりと母を相手に、馬屋の前に立ちながら話込んでゐた。さういふ父の話聞き込んだ私は内心非常な決心を抱いた。俺は死んでも父母を助けよう。こんなざまでは一生彼等の様な人間の下敷にならねばならぬ。父がたつた今私を叱かつた言葉も、そのまま眞理だ。俺は死んでも田へ水を引かう。さあ行かう、と私は充分着物

を着てマツチを懐にし、右手に鋏を、左手にケラを持つて父の言ふた三本松へと急いで行つた。

三

三本松田とは、田圃の中に老いたる三本の松が生い茂り其處がその邊の田圃の人々の休み場になつてゐる所だ。だからこの邊の田を作る人々はみな自分の田を三本松と呼んでゐた。私の家でも其處に三段五畝歩の小作田があるのであつた。

そして私は矢張りその三本松の下に行つた。すると私の田の直ぐ上田の徳杉がもう頑張つてゐた。私はその徳杉に向つて、

「今夜矢張り夜水を引く心算かなあ。徳杉、おめの田には水が一面にあるではあなあ、今夜俺の處に引かしてけれ、俺の田は見る通り水のある田が不足でねいが、今夜おめさい止めでければ、俺らが三本松の處では一番上田になるがら、ちとこ、(少し)でも多く水引も出来るがら」

と願つた。徳杉は、

「何に俺らもう二時間も掛ければ止めるがら、その時、んが、一人でこの水を朝まで掛ければ、んがの田も朝までには水が一ぱいになつてゐるべひ、今夜なんかもう誰れもこねがもしいね(知れぬ)」と言つた。それで私は今夜こそ一人舞臺だと思つて内心喜び、其處にケラを置き、一旦田に行つて水口の處をかたく止めた。それから田を廻つて見たが矢張り水は七八分通り乾いて、そして明日一日たつたら殆んどまた毘沙門田の様な情けない状態になることは解り

切つてゐた。上田の徳杉田にはまだ水は四五寸あつた、風の吹く度に小波をよせ稻は景氣良く葉を風のまにまにそよそよさせてゐた。私はこの田を見てたまらなく羨ましく思つた。そしてこの田が私の家の田だつたらどんなに幸福だらうと思つた。でも徳杉の話が本當だとすれば私の田だつて朝までには水田になる。いや、して見せると考えながら徳杉の居る三本松の下に歸つてきた。そしてまた別の二人がきてゐた。これは私の田より下田の方の人々であつた。この二人が私を見て、矢張り私が徳杉に向つて言つた事と同じやうな事を言つた。この人達の田は更らに私の田よりも悪るかつた。だからこの人達は私の田を見て矢張り私が徳杉の田を見て感じたことと同じやうなことを考えてゐたであらう。この二人は金助に兵太と言つて何れも私と同年輩であつた。徳杉は私等より年が十も多い人で大丈夫な人であつた。

「やあ、金助に兵太よ。今夜徳杉が水を切りあげて歸れば、多少はんがばら(汝達)にも分けてやれるがな、徳杉は中々強慾で水が多くて稻が腐りかけても、上田だと言ふ権利をふりまはして水をかける人だからなあ。今夜だつて本當に歸るかどうか解るもんでね。歸らねばんがばらには當然一滴だつて行く譯はない、だからあきらめて歸つた方が良ぐねいが」

と私は言つた。そして内心直ぐに悪いことを言つたと苦しんだ。けれども私は務めてその内心の苦痛を顔に出さぬように、そして何虚までもその良心的な苦痛を感じまいと努力した。

「まあ、いいがら、んがばらこの水は俺が上々の人達の水揚げか<sup>(14)</sup>

ら少しづつ分けてきた水だから、今直ぐ分けてやることはできねが、欲しいならんがばら矢張り水源の方に行つて分けて貰つてけばいねが、ひば(さうすれば)假令い一滴でも分けてやるがら、んだがらまあ行つてけば」

と徳杉に進められて、私は歩き出した。金助も平太も私の後について歩き出した。彼等はむしろ來なければ良いと内心に思ふたであらう。

日は全く暮れて後についてくる金助平太の影もはつきり解からなかつた。星は矢鱈に遠くの空に輝き、水のある田には稻と稻の間に點々と寫つて見えるばかり、そして蛙の鳴き聲ばかりやかましく聞えるのだつた。

#### 四

水路をたどつて吾々三人が歩いてゐるとき金助は言つた。

「今少し行くと忠二えの水揚げが一つあるよ、若し揚げに誰れも居らなかつたら根こそぎに破つてしまふよ。あの水揚げの水があれば田の四五枚はかかる。その次ぎに金一家の水揚げ一つある。あれもその手でやれば田の四、五枚はかかる。だからその大水をどつと流して徳杉の水揚を自然に破れるようにするでねいが。こいながら吾々が上の方に行つて猫の小便程の水を貰つてきて見てもその水が朝まで田に入れても大したごとはない。それよりも大水を一度にどつと入れて三枚でも四枚でもの田に水は溜めなくとも良い、只ざあつとかけ流した許りでもそれだけ稻は一日景氣が良くなつてあるべ

ひ」

「それではこつから戻つてめいめいの水止めをぐわりと止めがら、そして別の道をいつて一番上の金一家の水揚から破ることにするでばな、どうだ」

と平太は言つた。

「そんなうまいことなんかあるもんか、忠二だつて金一だつてそれは水揚げの處に寝てゐるよ。それよりも話込んで貰ふ方が一番良いよ」

と私は私に都合良い意見を吐いた。そして彼等をかまはず私は歩いて行つた。彼等は不承無承についてきた。何れも自分の足元に注意しながら。そしてもう忠二家の水揚げだと思つて一寸前方を暗夜にすかして見たら誰れも居らぬらしい。これは幸ひだと思つて行つた。マツチを明かして忠二家の水口を見たら別に水は入れて居ない。ただ徳杉の分けてゐたのが少しづつ流れてゐた。

「これを歸りに根こそぎ破つてゆこう」

金助はさう言いながら、また上の方に歩いた。次ぎは金一家の水揚げだ。近づいて見ると、確かに水揚げの處に黒い影が見える。矢張り金一は居るよ、と語りながら側まで行つた。ぶんと酒氣が鼻をかすめた。金一親方は、うんともふんとも言はないで黙つてゐた。私共は可笑しいなあと思つてマツチで明して見たら親方は酒の氣で良い氣持で眠つてゐた。

「あぶねいなあ、そくたらざまして水揚の中に落つるとくたばってしまうべひ」

と私は言った。

「何に呑氣な親方だ。酒呑んで眠つてゐるだけなら、田に水もい  
つべあるべか。あれ見れ田には星がみんな寫つてゐらあ。この奴も  
仲々欲張りだ、この分なら平氣で根こそぎ破つてもいいでば」

と金助は言った。

「何にそいよりも、この親方を三人で水の中にふぎじり落して、  
ふとりで落つた事にして少しぐれ水を吞まひて、そいながら俺ら三人  
行つて助けてやり、そいがら家の前まで送りとどげれば、結局もう  
朝まで出てくる見込みがねい」

と平太は言った。

然し私はここまでやらなくとも、水は分けて貰つてゆけば徳杉の  
次ぎが私だ、徳杉だつて朝までには居らぬに決まつてゐる。だから  
これも根こそぎ拂つてゆく方が良いと思つた。それで、

「んがばらがやりだければ、やつた方が良い」

と私は勝手に歩き出した。彼等はまた後についてきた。水源の處  
までたどりつくと、其處は大きく二岐れになつてゐて出てくる水の  
大半は上の方の水路に流れていた。其處で暗い處を石を探したり泥  
土を運んだりしてやつと全體を食ひ止めて、そして勢良く吾々の方  
へ流した。さうしておいてから脱兎の如く走出した。水より先きに  
なり、金一の水揚げを根こそぎ拂ひ、その次ぎは忠二の水揚を同様  
に拂ひ、三人は自分の田へかけつけたのである。徳杉はゐるかと思  
つて三本松の處を見たが、徳杉は居ない。彼の癖で何時も水は入れ  
放で歸るのだつた。私はそれを知つてゐたので、これはしめた、

手早く徳杉の水揚げの水を先づ私の田に流し込んだ。彼等はそれと  
も知らずに、今あの水が自分達の田に流れるだらうと準備をしてゐ  
るのだ。どつと流れる水の音。併も闇夜に流れる水の音。蛙の鳴く  
音と妙に調子が合つて流れる水の音。全くこんなにも氣持の良い事  
はない。暗い中にも目を田面に近づけて見ると、稻は下方へかなり  
なびいてゐる。日中とはまるで反對に五寸一尺十尺二十尺と水田と  
化し、星の寫る数が増していつた。この分で朝までかけられたら、  
私の田も徳杉の田の様になり、父の喜ぶ笑顔も見られる譯だ。

## 五

然しそれは夢でとうていそんなことは望めなかつた。金助と平太  
はまだ水がこないかとやつてきたのだ。そして三本松の處に行き、  
「やあ徳杉、徳杉、俺ら水を分けて持つてきたから」と呼んだ。徳  
杉はもう今頃家に歸つてゐるのだらう。何んの返事もなかつた。

「なに徳杉の野郎も歸つた。ほんとに良かつた。今夜俺三人きりだ  
つたら、んがばらにも多少水は分けてやれるがなあ、あと人は來な  
いでければよいが、まだまだあの水は俺れの處まではこないがら、  
もう少しゆつくりした方が良い」と私は知らん顔していた。けれど  
も彼等も馬鹿でない。

「いや、あの水勢ならもう其處まできたべひ、いや、もういげ  
(汝の家)の田まで入つてゐるかも知らね、さあ行つて見るでば」

と金助と平太は立ちあがり、私の水揚の處まで行こうとした。私  
は彼等のあとについて行つた。私の水揚げの水口の處まで來ると金

助は手を差のべてきはつて見て、

「なんだい、もう早い、水はどんどんいげの田に入つてゐるでばこな、さア平太、三本松の處に置いてある藁に火をつけて持つてけい、その明りで水を分けて貰つてゆくでば」<sup>(18)</sup>

と言つた。

「さうげい、三（私）しゅうも中々ぬけ目がねい」

と平太はつぶやきながら三本松の堤にある藁を取りに走つた。そして藁を丸めて束ね、それに火を點して、水揚げを明くし、そして私に水を分けてくれと言つた。

「うん仕方がねい。分げでやる。全量の二分の一位は俺れの田に流すんだよ。大抵これ位だらう」

と言つて私は自分の鍬で勝手に水口を開いて流してやつた。

「なに三人だから、三しゅうは三分の一取れば良いでねいが、なあ平太」

と金助は言つた。

「馬鹿なごと言ふなよ、おい、貯水池の水なら上も下も不等といふことが主張もされるべども、だがそれだつて矢張り上の田の人々がどうしても、水は高い處より低い處に流れるものだ、といふ理を言つて、どうしても水を多く入れるもんだ。それが貯水池の水はひだつてからなくなり、今この水は本當の出水だべひ、出水には昔から習慣として上に進む程権利を持つてゐる。だから、今夜の場合は、俺れが一番上だ、半分でも分げでやるどいふごどは結局友達仲間であればこそだよ」

其處で金助も平太も黙つて、その半分の水の流れについて自分達の田へ引返していつた。そして彼等もまたその水をこの法則で分けるであらう。だが然しこの水は二つの大水揚を破つて來たための多量の水で、これを今標準にして彼等に分けてやつたが、然しあの揚の水が無くなれば當然水量が不足になりそして出水は全部俺れの田に入るのだ。これは一時のことだ彼等はせめて三時間も黙つてゐてくれれば良いと私は心の中で願つてゐた。日中はどうしても上の方の人達がやかましいから、とても私共の田には入らない。だからせめて今夜だけでも思ふ存分水を入れたいとあせつた。そして三本松の下にけらを敷いて腰を下して考え込んだ。遠くの方で金助と平太は矢張り藁に火をつけて、多いの少くないのと聲を大きくして言ひ合つてゐた。この様な早魃になると、下田の人はどうしても、蝙蝠や野良犬の如く、闇夜に活躍しなければどうにもならなかつた。夜の人は日中の水より田に溜るものと良く父は言ひきかせてくれた。三本松の下で休んでゐるよりも、自分の田の水口の處で休んでゐた方が安全だ。若し金助平太が俺れの水揚げを破つてしまへば大變だからである。かうして自分を警戒しながらも、暇さえあれば上の人々の水揚げを破る事を考えるのであつた。そして自分の田の直ぐ上の徳杉の田の水を見てはたまらなく私の心を波立たせた。やがて私はやつてやらう、と重大決心をした。私は立ち上つて、徳杉の田の一枚一枚の水口を約一寸位づつ低くして歩るいた。さうすれば一枚の田から一寸づつ水が流れるのである。徳杉の田の面積と私の田の面積とは同じであるから、その水を私の田に流せば結局私の田が

全部一寸づつ水が溜ることになるのである。この闇夜に誰れが知るものか。流してやれ、明朝徳杉がこの事件を知つて、私を殺してもかまはない。一寸づつ流しても、矢張り徳杉の田は三寸位はある。四、五寸の水は稲に害があつて益がない、と農事試験場の技師が教えてくれた。徳杉はそれを知らないで、生れつきの馬鹿慾を出して、毎日一人でこの田に水を引いてゐるのだ。かう私は勝手な解釋をしてとうとうこの罪惡を斷行したのだ。

## 六

再び私は水揚げの處に戻つて來た。水口の水の有無を見ると水は流れてゐたが、私の分けてやつた通りになつてゐない。水口の中央が少し凹んでゐる。これは正しく金助平太の誰れかが足で力一ぱい踏んだのだ。私はまた元の通りにした。さうすると、もう最前の大水は流れ終つて金助平太の方に流れる勢はなかつた。それでも私はかまはずに置いた。私の田に寫る星の数は段々多くなつてきた。私は嬉しくてたまらない。私はけらの上に横たはつて水口を見守つてゐた。

暫くすると、黒い影が二つ下の方から極めてしのび足で私の方に近づいてきた。私は黙つてゐる。その影は矢張り私の水揚げの處にきて一間も前の處で私の居ることを發見したらしい。

「やあ、水はどうだ。上から流れてきてゐるがや。俺らどこさは少しも流れでこねじゃ」

矢張り金助と平太の二人だつた。

「んだつて上から何にも流いでこねもの、流いでこね水は分けてやれねべひ。んがばら二人でまだ上の方に行つて水を持つてけば分げでやるよ」

と私は言つた。

「そいでは三しゆうも一つちよろに行くべひ」（一緒に）

平太はさう言つた。

「俺ら行がね。んがばらが水をもつてけば始めて分げるし、何にも持つてこねば、俺ら上からのしぼり水だけでもこの分なら相當流れるもの」

「そんだらむちなな事言はれで困る。それは勝手な理窟だべ、この水路は三しゆう一個人の所有でねべ、吾々が上から水を持つてくるにもこの水路は是非通るのだ。さうすれば三しゆうがここに居る間は嫌が應でも三しゆうの田にばかり水が入るでねいが、それを自分では歩かずに吾々の持つてきた水を座つてゐて分け取るといふことは一體横着だ。友達同志としてそんな惡根性を起しては困るべひ」

と金助は私に喰つてかかつてきた。

「んだつて、俺ら上の徳杉なんかは何時もこの手で、俺ら水が慾しいと思ひば、足の下が減るだけ歩いたもんだよ。んがばらこそ道理の解からぬ理窟を言つてゐるんでねいのが」

と頑張つた。

「三しゆう、んがはどこまでも頑張るなら頑張つても良い、然し俺等二人で今これから上の方に行つて水を持つてきた場合、腕づく

でも、んがの水揚げを破つて持つて行くがらなあいいが」

と平太は、私に斷つて行かうとした。其の時私は突差に喧嘩をしては結局自分は負けると考えた。さうなれば馬鹿らしい。

「んだつて俺ら行つたあとに誰れがきて、俺ら水揚げを破つたら大変だからよ、無理が通れば道理引込むだ、ああ、それでは一緒に行くこう、さつさと早く行つてくるよ」

私は言ひながら歩き出した。

「歸りに水路に添ふてくるように、行く時は近道である本道を通らう」

と私は言ひ出して、其の道を通ふて行つた。九時三十分の終列車が三本松の前の驛を通つてからは、とづくに一時間は経つてゐた。

夜はしんしんと更けて、蛙は益々感傷的に鳴いてゐた。本道はもう一人の人も通らなくなつた。本道に添つた家々はみな寝てゐた。

「ああ、全く嫌になつてきたなあ、俺らもあしてゆつくり蚊帳の中にもぐり込んで寝られる時が何時くるだらうなあ」

と三人で語りながら水源の處まできた。平太は眞先きに水路に飛び込で見て、

「何にまだ、俺ら方の水口は止められてゐるよ。これだもの水がこないのも無理がない。あの脇本の野郎がたも油斷無くここまでやつてくるんだなあ、さあ、んがばらもはつてけじや、さ」

と言つた。私と金助の二人もまた入り、矢張り上の水路の方を石や泥土でかたく止めた。それが済むと水路傳ひに見ていつたが、途中の水揚は吾々が被つたままになつてゐた。

さつさと歸つた吾々は水のくるまで三人で三本松の下に休んでい

た。動いてゐる時は大して蚊のことなど氣に止めないが、一回腰を下して休んでゐると何千何萬の蚊が鳴き乍ら、吾々人間の血を求めて進軍してくるのである。これは恰度數十臺の飛行機が高空飛行をしてゐる時の音と同じ感じがするのであつた。だがその音ばかりなら嫌でもないが、間もなく全身が圍まれ、頭や手足をさし初めるのだ。何回となくさされる様になれば、外氣の冷寒と共に急に全身に寒けがさしてくるのであつた。「さあ、大抵水はきたら、三しう分けるよ」と金助は立つたあがり、ぐんぐん、自分の水口まで行つた。私も平太も行つて見た。金助はマツチを點して見て、

「何んと早いもんだもう水はきたじやや、さあ早く分けてくれよ」

と言つた。私は矢張り最前の如く、半分だけ分けてやつた。金助と平太は矢張り最前と殆んど同じ様にして行つた。そして暫く経つてから彼等はまた三本松の下にきた。

## 七

「もう十二時過ぎだべなあ、これまでこねばもう誰れも水引にはこねだろ、少し火でも焚えであだるがなやどうだ」

と私は言つた。

「さうだなあ、なんば夏でも田圃の夜中は寒びじや、それに蚊もゐるし、さあ俺らも焚ぐでば、みれ下田の方のあちこちに火が焚えて見えるよ、矢張り夜水ぶぎは吾々だけでないなあ」

と金助は言つた。平太は、



「したつて、この藁を焚くのはいだわし、<sup>(21)</sup>この藁は下に敷えてその上にけらを敷き座るごとにして、何にがその代りに焚くものを見付けるでばなあ」

「さうだ、其れは良い、そいではあれを持つてこよう、あの驛長の家の側にある、鐵道の古枕木を盗んできて焚ぐでば」

と金助は言つた。それにきめて三人は直ぐ鍬を其處に置いてこそ枕木盗みに出た。成程栗木の古枕木は何百本と積まれてある。工夫が自分達が焚くために作つてあつたのを盗むことにした。

「いや大きいのが焚えて、焚甲斐があるで、だがら二人で大きいのを二本、一人はその割つた小さいのを持つて行くでば、などだ」  
(ごうだ)

と平太は言つた。

「ああその方が良いな、處がこの驛長は中々氣のきいだ驛長で、家の側の畑には多分今頃胡瓜や馬鈴薯<sup>アレンジャ</sup>が食ひる様になつてゐるがもしいね、そいを少し持つて行くでば、なあ、んがばら」

金助は極めてひくい聲で言つた。

「それも良いな」と三人で着てゐた上着<sup>ナガフ</sup>の裾を腰までまくりあげ、帯にその先きを出込んで、其の袋のやうになつた處へ、馬鈴薯と胡瓜を入れることにして畑に飛び込んだ。

「全くだでいや、百姓でもねい癖に、この作物の良いねがては、俺ら驚いだ。大した良い胡瓜が成つてゐるぢやあ、てもど(汝等)がだ」

私は胡瓜をもちでは裾の袋に詰め込んだ。

「なにこの譯長、道樂だものこの畑に作つた物を賣つて暮さねば生ぎれねいような者であるびし、うんと盗んであへちや」

「毎日魚だ肉だ、菓子だ、とうまい物ばかり食ひやがてゐるがら、その糞もまた滋養がたつぷりあると見えで、作物もこんなに早く大きくなるもだてが、おらたまげだちや」

平太は馬鈴薯を堀つて裾の袋に詰め込んだ。

「大抵この位にして止めでゆぐでば、あしたの朝<sup>朝になつて</sup>まね驛長起きで見で腰拔がしやがると氣の毒だがらなあ」

と私は言ひながら止めた。かうして話をしながら盗み、焚木を盗んで三本松の下に歸り、どんどん火を焚き始めた。火を焚くと蚊は逃げた。體は温くなつてきた。

「そいがらあんぶらはあぶつてまぐらう(食らう)ごとにして、この胡瓜はこの儘まぐらうはう良い胡瓜だなあ、全く良い胡瓜だ。こんな胡瓜に味噌でもつけてまぐらつたらどんなにんめべなあ、舌拔げるべなあ」

私は感嘆し作ら食い初めた。

「全くだでこれで水がかかれは水引も樂なもんだがなあ、あはは」  
平太は高聲を出して馬鹿笑ひをした。

あちこちの村の、氣の早い一番鶏は鳴き出した。火にあたつてゐる前の方は熱いが、夜の更けるに従つて後の方が、しんしんと寒さがしみ込んできた。

「初胡瓜も良い香がするもんだな、俺等今夜初物を食つたから七十五日長生きするべな」

と私は言った。

「ほんとだなあ、この香は、馬鹿に女振りの良い女は初胡瓜の香がすると言ふが、ほんとに美人はこんな香がするもんだべなあ。てもどがだ、美人の香をかんだごどあるげ」

と金助は笑ひながら言った。

「だつて植物性のポマードや香水などこんな良い香がするよ、美人もこんな物をつけてゐるからだらう」

と平太は言った。

「<sup>そら</sup>だだてんが<sup>が</sup>ひば、譬喩は昔からのもので、昔からそんなポマードや香水などあつたがなあ、おらしらねなあ」

と金助は言った。

「いや、までよ。それはあつたどおら思ふ。近代的製品こそは無かつたらうが、何等かの意味の化粧方法は行はれたであらうと思ふ。それに大體この胡瓜の汁そのまゝを體につけても非常に良いといふ話でねい。そして見れば昔の美人はこの胡瓜の汁を腰につけて歩いたかも知らないよ。其處から出た譬喩かもしれなかいね」

(しれない)

と私は言った。かうして食ひながら話込み、そして胡瓜が食い終る頃には、馬鈴薯も焼けていた。

「ほらあ馬鈴薯が焼けた。これもまだ、んめべな」

と金助は一つ取つて皮をむきながら食ひ初めた。熱いのをふうふう吹きながら、

「何んだ、初馬鈴薯は思つたよりそんなにめぐねじや、少し水く

ひちや、てもどがだ」

と、語りながらそして三人で思ひ思ひに焼いては食ひなどしてかなり腹一ぱいになつた。

「さあ、まだ水源の方に行つてくるではてもどがだ」

と金助は言ひ、そして三人でまた出かけて行つた。行つてみれば俺等の方の水路はふさがれているのであつた。かうして朝までには七、八丁もあるこの水源まで、少くとも五、六回も歩かねば水なぞ引かれるものではなかつた。

## 八

歸つて来て栗の木の火にあたつてゐると、私の田の下田を小作してゐる祭治親父がひつこりやつてきた。

「おや、おや、このわけ者がだ、良い火にあだつてゐるなあ、水少しもくるがや、ほほほ」と笑つて言つた。

「<sup>(23)</sup>なもい、大して流れてこねものが、足が棒になるまで歩いでも田の一枚もかかるがどうが、解がつたもんでねい。祭治親父、お前今時來たつて何んと一滴だつて分けられるものがなあ」

と私は言つた。祭治親父は青黒い顔に、墨でもふいたやうな手拭を頬被り、如何にも寒さうに足をびくびくさしてゐた。

「おいひば今起きてきたんだが、水がかからねどで直ぐ歸える譯にもゆかねし。この良い火にでもあだりながらねげしや(寝る)る方がよつぽどいべ、そんな涙程の水ならどうせかげねい方が良い」

祭治親父は火の側に、けらを敷いてどつかと腰を下した。

祭治親父のこの言葉聞いて、私はほつと安心した。

「五十五、六にもなつてから、かうして夜中に起きて水引に出でくるのもうだでいるんだべな。なあ、祭治親父、あばの側に寝てゐる方が一番とぐだべ」

と金助は言つた。

「そのとりめ、ことり、(そのとうりそのとうり)だよ、若げ時はどうでも良いが、五十以上にもなれば糞骨折つて馬鹿慾もしたくない。

半分棺桶に入つたも同然だもの。それに俺ら、五十六歳になつても矢張婿は婿だと、家の婆々くされが八ヶ間敷く言いやがるし、少しばし體の具合が悪くでも、のげのげ床に寝ていらねし、んだがら矢張り婿にはなるもでねでい、んがばら譬喩に米糠三升あつたら婿になるな、と言はれてゐるものなあ、本當だで、んがばら」

と祭治親父は足を二本立て、二本の足の膝の上に両手をあげて手のひらを返し返しあぶり、足の間から鞆丸の方へ火熱を送りながらしんみりと述懐してゐた。

「祭治親父、俺等持つてきた馬鈴薯があるからあぶつて食ひでい、ん、初物だもの長生しで」

平太は灰の中に著を突込んだ。

## 九

「ほんとにこれあ、何時雨が降るかなあ」

と金助は言つた。

「雨なんかまだまだ降るもんでね、きんにや(きのう)も東の方

で雷が鳴つたもの、東雷百日の日照だと俺のおつちやは言つてゐだよ」

と私は語つた。

「それはほんとだべなあ、普通なら南風が吹いて、鳥海山がはつきり解るやうになれば、必ず其の日の内か次ぎの日には雨が降るに決まつてゐるんだがなあ、今年はどうしたもんだがあらぬなあ」

と祭治親父も言つた。

「ほんとだよ、眞山<sup>マキヤマ</sup>本山<sup>マキヤマ</sup>の方から黒雲がかがつてきて、今にも降りさうになり、きつと今度は洪水になる程雨が降るよ、と思つて、かげでるだ水まで止めで家に歸つたごどもあつたが、それつきり一粒の雨も降らねし全く自由のならぬ空だ」

「全くだ、世界中で人間の自由にならないのは空ばかりだ。自由に雨の降らせる機械が愆しい。吾々百姓の作つた米を平氣で食ひやがる者は譚山居るでいふ話だが、いまだ、ほんとに百姓のためになる發明はふとつもね、あまぐれい倒しがだめ」<sup>(24)</sup>

と金助は語つた。

祭治親父はそろそろ焼けた馬鈴薯を掘り出して、

「おお、これは良い御馳走だ。良い御馳走だ」

とがむしやらに食ひ出した。

やがて段々と話の種もなくなり、話も途切れ途切れになつてきた。そして全く一同力氣なく黙つて火にあたつた。馬鈴薯を食ひ終つた祭治親父は、

「俺らこれがら朝まで一眠りするでや、んがばらも眠むらねがな、

うん」

と言つたので、俺等も少し眠らうと、お互にけらを敷いて右手枕に或ひは左手枕に火を中心にしてこくりこくり、と眠りかけた。けれども本當の熟睡ではなく、背中を刺し込む明け時の寒さは頭から離れず、火を焚えてゐても矢張り時々ぶうんと鳴いて飛んでくる蚊の聲も、また村の鶏の鳴くも二番どり三番どりと良く解つてゐた。

祭治親父はほんとに良く眠つてゐた様子だつた。たまに、ゴウ、ゴウ、ゴウ、ゴウ、といびきをかいてゐた。

初夏の六月末とは云へ、北國の夜明はまだ特別に寒かつた。東の奥羽山脈中の日の出てくる大平山の空はもうほの白くなつてゐた。三時一寸過ぎてゐる頃である。

一〇

火は下火になりきつてゐた。私は起きて火を焚きなほさうとした。

金助も平太も同時に起きた。私は腹一ぱいの欠伸をして、

「あう、あ、寒い、寒い……」

と言つたら、彼等も、

「欠伸は傳染<sup>ウツ</sup>るもんだなあ、アウ……ア」と欠伸をして、

「矢張り寒い朝だ、火を焚こう」

とまた三人で火を焚き始めた。

「さてどうなつてゐるがなあ、水は、田の一枚もかがつてゐるがなあ」

とお互に語り合つてゐる時、眠つてゐたと思つてゐた祭治親父は、

突然力一ぱいに、

「ウウ……ン。ウウ……ン」

と、いびきでは少し大き過ぎるやうな、またどこか苦しやうな一つの呻り聲を出して、兩足を火元の方いぎゆつと伸ばしてよこした。「何んだこの親父氣味の悪るいごどをやりがるもんだなあ。足をそつちの方い曲げてやれじや」

と金助は言つた。其處で私は、祭治親父の伸してよこした兩方の足首を、兩方の手でそろへて握り起し、曲げんとした時、私の全身感覚がひやりと全く言ひようのない嫌な恐怖感におそわれて祭治親父の足をぼかんと、またもとの通りに落して二足ばかり霧中に退いた。この私の動作を火の明かりで見た金助平太の二人もまた、ぼかんとして一歩退いた。

「三しゆ(私を指して) なんとしたあづだて、人を驚かしやがつて」

と彼等二人は同時に言つた。

「なもかもあつたもんでね、先づ祭治親父の足を持つて見れ、しだふと(死んだ人)の様もんだよ」

と私はさう聞かせてゐるうちに、また、

「ウウ……ン、ウン、ウン」

と祭治親父はやり出した。

「これあ愈々可笑しいで、變だな、金助先づてもでね藁に火をつけて見れままづ」

私は、急いで金助と平太に火をつけさして、祭治親父の頭の方を

見た。そしたらこの親父兩手を組んで、組んだ手の上に顔を打つ伏してゐた。益々私は恐ろしく變に思はれて仕方がない。平太は見て、

「何んでもねでは、こな、この親父おどげやてけつがて」

と言つたが、然し私は足を持つた時の嫌な感覚が、まだ生々と全身から離れようとしなかつた。

「いやそんでもねいよだでい、先づ呼んで起して見るでは、てもどがた」<sup>(26)</sup>

と私は、続けざまに、

「おど、おど、おどでは、これ起ぎれ、ま、夜が明けだで、おど起ぎねが、早く、さあおど、起ぎれでは」

とをゆすぶり起した。けれども返事どころか、動かうともしない。「やあ、てもどがだ、この祭治親父は死んでゐるで、これあ、大變だどこれは、いい」

と私は全く霧中になつて叫んだ。けれども金助と平太は矢張り平氣で首を傾けて火の煙を除けてゐた。

「馬鹿しやべするなよ、何にしにひば死ぬわけもねでねが、かまはねで置けでは、さびぐなれば今ふとれこ(ひとりで)起ぎるべひ」

私はほとほとあきれて、

「いやそでねいよだで、先づ顔を揚げて見るが、火を持つてきて見れよ、てもどがだ」

と言いながら三人で火にてらして私は顔を揚げて見た。とたんに抱えた手は思はず急に左右に開き頭をそのまま落して三人一緒に飛

びあがつた。

「ほうこれは大變だ。何んとしたらいべが」

すると金助と平太はほんとに合點がゆつたやうに、先づ自分の手拭を水に入れて、その手拭を搾つて祭治親父の頭にかけた。それを二、三回繰り返した。平太は太いふるい聲で、

「おど、おど、なとしたで、ぐわりつとひ(確りしろ)うん」

と體をゆすぶつても、この親父は眼を据らして只口から、ぶぐ、ぶぐ、と泡沫を吹いてゐるばかりである。私は着物の合せ目から手を入れて體の中にさわつて見たら、まだ温味はかなりあるし、また手早く手首を握つたら微かに脈はある。

何にこいひば、タカブグ<sup>(27)</sup>でねてが、こいひば、飯森の鎌吉もこんなごどやたのを見たごどがあるで、かまねでおでもふとれして生きるでは」<sup>(28)</sup>

と平太は平氣になつた。けれども何にも知らぬ吾々は、

「したたて何にタガブグ、でもかまわねでなげでおぐのはおどちらね(氣の毒)、なや金助、かわりがわりに負ていて、い(家)さ置でくるでは、なあ」

私は話込んだ。

「んだな、こんなもの、ことに置くのもやがもけ(厄介物)なるもの、したら俺れに負ひれじや」

金助は言いながら身構えたので私と平太の二人がかりで、祭治親父を持ちあげて、金助の背中につかけた。そして金助は手を後に廻はして、親父の兩足を握つて歩き出した。私と平太もそのあとに

なつて行つた。

夜は可成明け、遠く近くの山々はほんのりと浮かび出し、裾の方には煙か、露か、たなびいてゐた。そして日の出る大平山の空は刻々に赤く變つてゆつた。蚊と蛙は直ほ止まず鳴いてゐた。(未完)

## 第二章

### 一

祭治親父の家にやつとのことで歩き着いた。けれども、この家の者は起きていなかった。「アバ(親父の妻を指し)まだ起きねげい。

夜があげだ。起きでけれ。先づ早く起きでけれ。大變だ。アバ。起きれ。起きれ」

と私はアバの寝てゐる軒板をどん／＼と叩いた。アバは

「何にしたてひば。夜、夜中。ふとどどど起きてひば」

とまだ眠り足らない様な聲で言つた。

「夜夜中でねいで、アバ。もう日が出てくるで、まなぐをさまして見れ、ま、節穴がら明かさしてゐるべひ、そんなからびや(29)みな話しねで、先づ早く起きれま、いい、家のおどが水引に來て體を悪くしてなあ、おらがだぶてきたところだせば」

と平太は言つた。金助はとても重いといふので大戸を開けて入り、薄暗い茶の間の板障子を開けて其處へどかんと下した。

平太が太い聲で叫んだのと、金助が下した音でやつと家内中の者が襦袢寝巻の袖で眼をこすりこすり起きてきた。然しそれはほん

とに驚いた様子もなく、むしろ、良い氣持で寝てゐたのを早く起きたのが不平らしい面相で起きてきた。婆々もアバも、婿を取つた姉子もみな起きてくるには來た。婿は北海道に出稼(30)に行つて不在だつた。金助は重荷を下したら急に汗が出てきてたまらず、何回も繰返して汗を拭いた。

「なななだて(31)このテデ(親父を指し)のけしぎ見れ。ま、何時もタラケデ(なまけること)こくたら眞似するもの、なあにその水揚げの中さぶちめで置けば良かたあじ。こごまで、こごまで背負(32)て來てこねても良がたものひば。其處の肥積の上さでもぶ投げて置でけれじゃ。おめがだ」

と、アバは言つた。

「あやでば、あやでば、(さうだ／＼)この馬鹿父。何時でもかつでもたらけて、けつがてひ困(33)るもの」と姉子は言つた。

「うん、うん、このごつさらし(33)外家(ほかえ)のふとの前(め)でもかまわねでたらけてさらしして、うんうん、くたばてしまじや。あどさよ(安堵する)」

と、婆々は言つた。そして別に手當をしようともしないしまた運んで行つた吾々を返つて迷惑でもあつたかの様な態度で家内中で、この親父に対して冷やかに怒鳴つてゐた。吾々にはたつた一言も、禮の言葉を發しなかつた。

祭治親父は金助の背から下されて横になり、それつきり生きてゐるのか死んでゐるのか皆目動かなかつた。吾々は大きな手柄をして家内中から賞(ほ)められ、また酒の好きな金助や平太には先づ一ぱい位

は出るだらう。彼等もそれを信じてゐた。しかしこんな場面を眼前に見せつけられ、且つ聞かされた吾々は二の句も言えず後も見ずにさつさと我田を指して逃げ歸つた。

二

眞赤な大きなお日様は今日も憎らしく大平山の上から平氣ですく／＼と昇つた。三本松の處では、昨夜から今朝にかけての残骸がだらしなく残つてゐた。

田の畔を踏みだした私は急に徳杉のことが思ひ出された。若しも昨夜の行爲が発見されて、水路の泥の中に打ち投げられたり、散々殴られたりしはしまひかと心配になつてきた。何んと言つても徳杉の田と我田との境の畔を切り開いて流した跡が一番目につくのであつた。何うか神様、俺ら苦しいんだ。今日一日徳杉がこの田に來ない様な事を仕出かしてくれとさう心の中でどんなに願つたか知れない。兎にも角にも我田の畔を次ぎ次ぎに渡つて田を見て行つた。かうした人間力の犠牲に依つて稻は心ゆくばかり吸水し、そして葉の上にはたつぷりと露の玉をのせて、高々と上に向つて開いてゐた。これを見た私は前の苦しみも何にもかも忘れて稻と一緒に喜ぶむせんだのであつた。だが不思議にも徳杉の田の方によつた我田にはかなりの水は入つてゐるが、反對に下隣の田即ち祭治親父の田との境目の田ならび全體が田は濡れてはゐるが水は溜つてゐなかつた。却つて祭治親父の田に一寸位ばかりづつ水は溜つてゐた。

私は不思議に思つてその境の畔をつぶさに點檢した。若しも野鼠

の穴でもあつて、それから水が通つたのかもと思つてみると確かに水は穴から通してゐた。そして全畔境に二十四五の穴があつてそれから水は盡く通してゐたのであつた。私は凝つとこの穴を見て考えた。穴は鮮かに下田の田面から我田の田面に直線に通ふてゐた。怪しいぞ、と私は心の中で叫ぶと夢中になつてその穴の處を鍬で掘つて見た。けれどもその直線の穴が一つきりで、その穴に連続した穴は一つもなかつた。かうして念のために二三回も掘つて調べた。その結果はこれは確かに野鼠の穴でない事を知つた。野鼠の穴は幾つあつてもそれは曲りくねりに連続してゐるものである。これは確かに人爲的な穴である。暗夜に何回も水源まで水引に出ている間に祭治親父は知らん顔して自分の鍬の柄で通した穴に違ひない。かういふ穴からこと／＼と出る水口には定まつて水の泡沫が浮かび上がつてゐるものだが、あの祭治親父も自分の口からも泡沫を出してしまつたのだ。

「ああ、あ、人間はやつたりやられたりか」

と溜息をついて、私は三本松の下に腰を下して燃え残りの木を掻き集めて火を焚き、そして食ひ散らした胡瓜の種、馬鈴薯の焼け皮等を黙つて凝めた。祭治親父の芝居藝當等を考え、次ぎには矢張り心から離れぬ徳杉が來なければ良い事など恰も明時の空の様に入り變つて行つた。

かうしてゐる處へ金助がやつてきた。

「あや三しゆう。テモド(君)の田には大した水が掛つたなあ、俺おら田にはたつたの二枚きりぢやや。矢張り三しゆうは氣がきでゐる

るなあ」

さう言はれて私はどつきと胸を打つた。私が徳杉の水口を一寸づつ踏んだことを知つてゐるのか。とも思つたが然し私は平然と何知らん顔でゐた。

「などけ、前から水が田にあつたものひば、そいもそだが俺ら祭治親父のため穴を開けられたじゃや」

と話をそらした。かうして話込んでゐる所へ、平太は平素赤い顔を更らに赤くして田から戻つてきた、そして私其の側にくるなり直ぐ大きい聲で怒鳴つた。

「ああ、馬鹿くひ。馬鹿くひ。ふつとばげ（一と晩）水引し自分の田に水引しねで、ほか家の田に水引してしまた。あの鎌ちやの野郎、きつときいじゆうの夜（真夜中）きて俺等の様子を見て、それから俺の田の水揚を破つて自分の田に引で、家さ行ただらう。俺ら水揚げが破られでゐるもんだから、その水について行つて見だら矢張り鎌ちやんの田にはてゐるものひば<sup>(34)</sup>。二枚ほど水がかがつてゐるものひば。馬鹿くひな。こいでこんなことしてゐるよりも自分の田の水揚げを何回も見て廻るもんだなあ」

と平太は頗る不満相に後悔し興奮してそして腰を下さずにあちこちを見てゐた。

「三しゆうは穴を開けられだといふし、平太しゆうは水揚げを破らいだといふし、それや全くよべな<sup>(35)</sup>の事で、驛長きつと寝所の中で俺等どさ、ただつてゐるだも知らねで、そのひい（所爲）だではきつと」

と金助は言つた。

「何にいらねいげぐちきくんだ。いい。そんなごど、あれを一番先ぎに口出ししたのは、てもどだべひ。いまさなてがら罰脱れすると思て、このどぶでけし（國太い奴）やつてしもうで」

平太はとても氣があらつぽくなつてゐた。

「あの祭治家の乞食がだ、わざわざ背負て行てやるに、有難ども言はねで、酒の一口も呑まひねで、ほんとに犬みだいな奴等だ」

金助は巧みに話を其處へそらすと、

「ほんとだで、大だつてあの奴等よりは恩をおべでゐるであ犬猫よりも劣るであ」

と平太は同感して言つた。

「あいだもの祭治親父のこぼしのも無理もね。全くおどちらねなあ<sup>(37)</sup>」

### 三

其の時鎌ちやんくんは、向ふの大橋を渡り、極めて知らん顔をよそつて、相變らず癖のくんくんをやつてきた。この人は堪えず鼻から強く息を出して、くん、くん、とやつてゐるから村人は鎌ちやんくんと渾名をしてゐた。その鎌ちやんくんはもう六十以上の親父だつた。俺等の側に來ると先づくくんくと二度ばかりやつて、

「わけしゆう。早いじゃなあ。水引ぎがなあ」

と聲をかけたが、平太はその言葉が終らぬ内に

「この泥棒親父。んが（貴様）だべ。俺家の水揚げを破つて行た



のは」

と立ち上つた。

「なだけ(そんなこと)。俺らあ夢にもしらねもの。今起きて来た處だ。水場はふとりこやぶいだ(ひとりでに破れた)あづだべひ。それあ」

鎌ちゃんくんは極めて平ぜいをよさうてまたくんと二度もやつた。そして腰から煙草入のどうらんを抜き取り、煙管に煙草を詰めて、一ふくやらうと、鋏を側に置き、その腰を折り曲げて、私共の焚た火をつけようとした。その時である。平太はまだ火のついてゐる燃え残りの一尺五寸もあつたらうか、その木を振つて、

「この糞たれ、俺ら年いがねどもてふとちよしまして(弄ぶ)こん畜生」

と叫ぶと鎌ちゃんくんの被つてゐた、白い手拭の上から頭の眞中を、全體の力の八位も出して打ちなぐつた。ぐわんと音が出た。ほつと意識した時には既に鎌ちゃんくんは、ほんと後に倒れてゐた。

平太はそれでも猶止まず、氣勢に乗つて狂氣のやうにまたその木を振りあげた。

「この野郎を打ち殺してやてめひるんだ」

平太はなにかば泣き聲を出して叫んでゐた。私と金助はあつけに取られて手も出せなかつたが、このまゝにしておけばほんとに鎌ちゃんくんは平太のために殺されるかも知れぬ。私共も夢中になつて平太に組付いた。私は平太の胸にすがり、金助は平太の腰を抱きしめた。

「まで、まあ平太しゆうそんだら無茶なごど。先づ止めれ。まあ平太。人を殺せば自分も殺されるで。先づ止めれ、止めれつたら」

吾々はさう怒鳴り乍ら、あるたけの力で平太を押へた。

「この野郎を俺ら殺しても悪くはね。人をちよしましも程があるべひ。うん、んだべさ」

しかし平太は中々静かにはならなかつた。

ほんと倒れた後の鎌ちゃんくんは水揚げの處に足を二本伸して呻つてゐた。

察するに四回位轉倒したのであらう。其處までは少し離れてゐた。被つてゐた白い手拭は半分以上眞赤に染まつてゐた。煙草入と煙管は火の側にぼかんと残つてゐた。この間に、その邊の田圃に居つた村人が三人と、通りかかりの他村の人が二人ばかりと走せ集まつてきてゐた。

私と金助は素早く自分等の手拭を持つて、鎌ちゃんくんの頭の血を止めようとした。

「何んだこれは人殺しだど。この鐵鬼(平太を指し)命知らずだなあ。おそろし子だあ。」

と村人の一人は言つた。そしてみな鎌ちゃんくんの側に立ちよつた。平太はもう我に歸り、眞赤な顔は眞青に化してゐた。こんどはほんとに心配相に黙つて下をうつ向ひてゐた。

「ななんだ鎌ちゃん。ぐわつりとひ(確りしろ)、こんなけがぐれで、こんなじやましてなとする<sup>(38)</sup>。心をしつかり持て。うん、鎌ちゃん」

村人はさう鎌ちゃんをゆすり動かした。けれども鎌ちゃんは、うんともふんとも言はない。吾々は傷の大小を調べてゐる場合でないし、もつと急を要することが、鎌ちゃんの容態でびんと直感されるのであつた。自分等の手拭を頭に巻きつけても、矢張り赤い血は手拭を染めて止まなかつた。平太の手拭も村人の手拭もみな集めて、兎に角鎌ちゃんくんの頭を巻いた。

「おやあ。んがばら。かうして居らいねべひ。さつさど家さ連れで行つて醫者にめひねばなねべひ」

と村人の中年男は言つた。今度は私が背負つて行く事になり、みんなが手傳つてやつと私の背に乗せて村人はみな手をかけて、私は夢中になつて鎌ちゃんくんの家にたどりついた。家に着くまでに鎌ちゃんくんは、ハーハーと苦しい溜息を二度ばかりした。斯くして家に入り茶間の板戸を、金助はあけて、村人の手傳つてやつと私の背から、鎌ちゃんくんを下してねかせた。其の時はもう村人は二三十人も家の前に集つてゐた。

#### 四

家内の者等はみな眞青な顔して

「なとしたてひば、俺ら家の爺ちゃひば」

と問ふた。

「何に水引喧嘩で、平太が少しむでつぱちしたために頭から血が出だもの」

金助は少し遠慮勝に言つた。

「爺ちゃ。爺ちゃでばあ、そんなに非道くやらいだてが醫者でも迎けるが、悪りば」

と鎌ちゃんの妻は寝てゐる鎌ちゃんの着物を握つてゆすぶり返した。その時鎌ちゃんはぼかんと眼を開いて、両手を胸の上にあげてゐた。家人は枕や掛蒲団を持つてきて、枕をさせたり、蒲団を腰のあたりまでかけたたりした。

「ああ、苦し苦し、俺らこのままでは死ぬであ」

と鎌ちゃんくんは、かなり苦しうな聲で言つた。然し絶對絶命と言ふ程の苦しきではなかつた様に思はれた。

「何んだと、爺ちゃひば、死ぬど、そんだらじやましてひばなんとする。ぐわつりとひじゃあ、爺ちゃでばあ」

と妻は鎌ちゃんくんにとりすがつて聲を出して泣き始めた。集まつている村人は、

「何んとひばかまねで置だて困るべひなや。誰れか馬を引出して醫者を迎げに行つてやれじや」

と叫ぶ人があつた。最前から黙つて見てゐた家の兄の鎌助は「そいでは隣家の若者がら行つて貰う」

と居合せた隣家の若者に頼んだ。若者は「そいではひば行つてくるで」と、手早く馬屋から馬を引張り出して飛び乗り走り出した。

家の女達は何んの事なく泣くばかりであつた。鎌助は自分の妻に命じて

「こら、そんなごととしてゐるよりも水でも持つてきて、額なづけでも冷してやれじや」

と言つた。鎌助の妻は思ひ出したやうに鹽に水を吸み取りそれを鎌ちゃんくんの側に持つてきて、使ひこなされた古手拭を冷してしぼりそれを額にあてた。鎌助は、富山の薬袋を佛壇の抽出の箱の中から取り出して來るとその袋の中から寶丹を掴み出して、その鉛の小さい丸い器物から、赤い薬をつまみ出して、それを父の鎌ちゃん口の口に押し入れた。鎌ちゃんは口をむくむくさせて、結局薬を吐き出した。鎌助はまた入れた。

「おや爺ちゃ、おめいひば薬吞まねで本當に死ぬ氣だてがひば。はがみして吞め。その内に醫者が來ると。うん、はがみひ」

と鎌助は言つた。家内も家外も大混雑である。私共は何んとも言はず、只黙つて見てゐるより外になかつた。

## 五

この騒ぎを聴きつけて、鎌ちゃんくんの家の本家の親父がやつてきた。

「何にしたてひば、水引くて人殺しまでするよな世の中になたげひば」

と言ひながらみんなの居る處を通り抜けた。鎌ちゃんくんの側に行くときとあぐらをかいて

「鎌ちゃん。どうしたて、ぐわつりとひ、うん、鎌ちゃん、ただ、ふとねがて(人のために) 仰がれ、殺されるよなぶざまになつたてが、うん、んがひば、俺いだで、俺いどご解がるが、返事して見れ」

本家の親方はさう鎌ちゃんに力をつける様に言つた。すると鎌ちゃん

「うん、本家の親方だけ。俺ら一つ頼む、俺ら死んでも良いが、あの畜生をうつつて(訴へ)してけれ、後生だよ、うん痛い、痛い、うん」

とややはつきり言つた。この言い方から推測しても、鎌ちゃんは、最前よりはかなり正氣に帰つてゐたらしく思はれた。

「あの氣違げたがれ見たみな平太の馬鹿め、年もいがね癖に人を殺す目に合せるなんて、ほんとに只にして置がれね。今醫者が來て診て貰つてから、相談の上でうつつてしねばならぬ者はうつつてすることにするでね」

と本家の親方は言つた。さうこうしてゐる内に十町離れた町から醫者は、馬に乗つて飛ばしてきた。隣の若者は重さうな黒皮のカバンを右手に持つて、息もきれぎれに馬の後についてきた。

家の下の道路を通る村人は「そんなにひでい怪我したのがなあ」と語り合つて通ふてゐた。角力取りの様なタイプで洋服の上に白い上衣を着た醫者は、先づ家に入つた。家人は

「それ旦那さんがきた。座布を持つてこい。そこを開けろ」  
などと忙しく、鎌ちゃんの頭の側の座を開け、其處に座布團を敷いた。醫者の旦那さんは悠々としてその座に胡坐をかいた。本家の親方も家内一同も丁寧に両手をついて

「御苦勞様でした」  
と頭を下げた、醫者は鎌ちゃんの頭を診る前に先づ家人に

「何にしたんだの、朝から怪我するなんて」と聞いた。

「何に水引で喧嘩したといふ話だす」

「医者ほうなづいて」

「どれ一つ診てやらう」

と私共の巻いてやつた血に染まつた手拭をそろ／＼、静かにほどこいていった。

鎌ちゃんくんは黙つて眼を閉ちてゐたが、醫者は一番最後の鎌ちゃんくんの被つてゐた手拭を、そろつと除き始めた。手拭は右よりの方の頭に食付いてゐた。それを醫者が引張ると鎌ちゃんは

「ああつ、痛い、痛い、止めてくれ」

とかなり聲をはりあげて叫んだ。そして手拭を頭の方にやつて、

醫者の手を除かうとするけはいを示した。

「動ごいたつて駄目だよ。みんなでこの手をつかまいてくれ」

と醫者は言つた。其處で鎌助と本家の親方の二人で一本づつ手をおさいた。醫者はそれから、その手拭をまたそろつと引張り出した。

「ああつ、痛い、痛い、助けてくれ」

「困るなあ、これでは、いい年をして……」

と醫者は言つた。

「何に痛いも糞もあるもだて、はがみひ、はがみひ、良いいげどしして」<sup>(41)</sup>

本家の親方も叱るようになってなだめた。

鎌ちゃんはほんとに痛たさうに、歯齧みした。そして眼から涙が

ぼろつと出てきた。

「ううん。おどつらねで」

と妻もまた涙を流した。やつとのことで醫者は食ひついた手拭を取り除いたら、また其處から血がにじみ出てきた。醫者は手早く、黒皮のカバンから水色の水薬を取り出して、細い筆の様なものでつけてやつた。それから血は止まり、醫者は指で頭を押して見たりピンセットで傷口を開けて見たりした。それから胸もとを開いて聴心器をあてて見たり、手首を取つて診たり、検温をして見たりした。そして傷口に赤いやうな薬を塗つて、油紙をあて白い布で何回もぐる／＼と綺麗に繃帯した。醫者は別に驚いたような様子もなく、案外平氣をよそうてゐた。家人は全く夢中になつて其處ばかり凝めてゐた。

醫者が繃帯を終ると妻は眞先きに

「旦那さん。傷を縫はねでも良かんしべが」

と訊ねた。

「何に大したことはない。傷口は割合に小さいが、底の方が少しは傷んでゐる。でも心配することはない。これでもさうだなあ、まあ二週間位はかかるだらう。ゆつくり寝かした方が良い。これは瘡の強い人<sup>(42)</sup>でせう、驚いたのが半分以上だよ薬はあとに取りに來い」

と醫者はカバンをしめた。

「旦那さん、そいでは、今日のお勘定は」

と鎌助は言つた。

「うん。さうだなあ、寝てゐたのを起されて來たから、先づ夜間

の分を貰ふ。馬おれ(出張費)が五圓に診察料と薬代が三圓だ」

それをきくと鎌助は少しためらつた、家人は顔を見合せた

「一寸旦那さん待ちであでくねんひ、細い金がないから、下の店に行つて細かくしてくるからねし」

鎌助はそれから自分の妻に向つて

「ほら、旦那さんや本家の親方に茶の一べもあげれでほら」

と言ひのこして下の店に走つた。

下の店といふのは私の本家の店で、その主人に泣きついてやつと八圓の金を鎌助は借りたのであつた。

その金を醫者の旦那に手渡しだ鎌助は、恨めしさうに神棚を凝めてゐた。

醫者は八圓を掴んで、洋服の内ポケットにねぢ込んで、相變らず悠々と茶間から下りて黒皮靴を履き、待たしてある馬に飛び乗つて一目散に歸つて行つてしまつた。

大したことがないと、醫者の言つたことを聞いた村人は

「醫者も良くあてるもんだ。これは癩の強い人だべつてなあほかんと叩かれたとたんに自分でかつと癩癩を起して倒れたに定まつてゐるんだべひ」

とこそ〜私語きながら歸つて行つた。

私も金助もそれで安心して歸つた。鎌助は其の時父の言ふ通り警察に訴えて療治金を取ると頑張つたさうだが、もの解りのいゝ本家の親方は、何に水引喧嘩はほんとの喧嘩であるまいし、水に流してしまえと言つて、たう〜訴えなかつたと言ふ。しかし平太の親父

は村合<sup>(43)</sup>ひとして黙つてゐることが出来ねとて、十圓だけ見舞金をやつたといふ話だ。これはずつと後の話になるがそれから四五年経つてから鎌ちゃんくんは、頭が變に狂つて首を吊つて死んでしまつたし、一方平太も何時とはなくタカブグを起すやうになつて、それからといふものは盛んに日蓮宗の太鼓を叩くやうになつた。

## 六

かうした數々の事件を一夜の内に経験した私は、家に歸つたのは八時頃だつた。それから朝飯を食つた。腹は空つぽになつてゐる筈だが、何んだか飯はうまくなかつた。父母はとつくに三本松田に田草取りに出掛けてゐなかつた。私が家に歸つたのを本家の祖父が知つてやつてきた。祖父は

「今朝の水引喧嘩で鎌ちゃんは死んだだけ叩かれたといふが、そんなに非道え目に合つたのがなあ。昔から水引喧嘩で叩かれたつてまだ殺されたてそれは叩かれ損、殺され損だもんだだから油斷をしないで、さつさと逃げるのが一の手だよ」

と言ひ聞かせてくれた。

「何に鎌ちゃんくんの傷は大したことないと言つたよ」

と私は答えた。

「父がなあ、朝飯を食つたら桶を持つて、小駒田に水揚げの溜水を汲んで田に流せと言つてくれて、俺に頼んで行つたから、行つた方がよいべ」

と祖父は私に言ひ傳ひた。私は綿の如くへと〜に疲勞はしてゐる

るが、然し他人に負けない他人に笑はれない良い稲を穫りたいと言ふ氣力は恐しいもので、何んの嫌氣もなしに食後また田圃に出掛けた。あわ良くば、我が田の上に三つ程ある水揚げを誰れも人が居らなければ破り拂つて、たとへ小便程の水でも良いから我田に引かうさう考へながら、先づ大水路の分岐點の處に行つた。其處は貯水池から流れる水路の二番目の分岐場所である。この場所を「小駒の大揚げ」と村人は呼んでゐた。其處はかなりの廣い處で、一旦貯水池から流れた水がこゝまでくると、小駒田方面の人々と櫻田方面の人々が集つて、其處でその水引人數によつて分水するのである。時に兩方面同數の場合でも、小駒田方面は、上地田であると言ふ理由をもつて、水は半分以上流されるのである。かういふ場所なので、水引時になると、何時も其處には五人三人が集つて話込んでゐるのであつた。この水揚げは一年に一回は修理された。其の修理の時は小駒田方面の人々だけ、各自俵を持つて集り、その俵に土を入れて土俵を作り、それを幾十俵を積み、太いつくしを幾十本も打つて大水がきても、また下田の人々が破らうとしても、さう簡単に破れさうもないように完全に作るのである。

そこには既に五人程の人々がきてゐたが、この人達は小駒田方面の人達でなく、全部果田方面の人達であつた。私は一寸意外に思つた。何故かといふと、果田といふのは貯水池の水のかかる範圍内で一番下田の事で、普通なら上々の田に水が充分ある時でなければ、この果田などには水の流れるといふことは思ひもよらないのであつた。だから果田の人達はこの小駒の水揚げには實際に於いて關係を

持つてゐなかつたのである。それがどうして今日五人も揃つて來てゐるのか、私は不思議に思つた。水路を見ると珍しい程の大水が勢良くがわ／＼と音をたて、流れてゐた。けれども小駒田方面には一滴の水も流してゐなかつた。この水を見て私は一層驚いた。そしてこの水をせめて一時間でも良いから我田にがわ／＼音させて入れて見たい氣持に驅られるのであつた。

「大した水だなあ。今日まだどうして一度にこの大水を流したのかなあ。俺の田も枯れる處だ。少し分けてもつてゆくがなあ」

と私は思はずさういふと

「何んだ。その言ふごと。眼を確かりあげで見れ。んがいの田の稲が枯れる處ならまだも良い。一番草も取り終り、早い人は二番草を取りかけてあるのに俺等果田に行つて見れ。まだ／＼一本の稲だつて植えてゐないから。田は眞白だ。全く雨がこぼれねで、涙をこぼしてばかりゐる。だから飯森の柏金源一に行つて談判して、今日一日だけ貯水池の水口全部をあげて水を果田まで一直線にもつて行くことにしたんだ、だから今日は上の人々は一滴の水ももつて行がねんだ。そのために俺等かうして上の水揚げ毎に番人をしてゐるのだよ、解かつたか」

と大威張である。

「だつて柏金源一も困る男だ。飯森村が貯水池の全權を握つて飯森の總代といふ肩書を持つて、貯水池の水の處分を獨斷でやるといふことは怪しからんなあ。あれは三百だからなあ」

と私は言つた。

「何に生意氣なことを言ふんだ。誰れが何んと言ふたつて實際に貯水池の實権は柏金が握つてゐるからなあ。そしてよべなも柏金は言つてゐるだ。明日の通水で途中彼是文句を言ふ人が居つたら、俺の家に来て来い。と。だから、んがも話が解がらねがつたら柏金の處に行けばいでねが」

と彼等は私をおどしつけた。

「だつてお前等の果田は天とうまかせ、とも言はれてゐる田で、雨が降れば幸だし、降らねば、じり(上の田の方からしぼり出る水)でその日をもつて行くのださうだが、そのため地主に納める小作米が良田の半分よりも安しいべひ。何に果田の連中は、金を見ひれば、糞を見た犬の如く飛んでくる柏金にそろつと握らしたべひなあ。だつて柏金の田が果山に一枝もあるでなし、みんなこの恩にあつて矢張り水は譚山無いのを見て如何に果田の連中が談判したつて、あの柏金さう容易にうんと返事のする男でねいからなあ。矢張り握らしたかもしれねで」

と私は思いきつて言つてしまつた。其の時五人の連中は鍬を持ちあげて、

「この野郎。出ほうげな口をきく、鍬頭で頭を打つ割つてしもうど」

「この馬鹿野郎、打つ殺してやれまあ」  
等々と怒鳴りながら私に向つてきた。

私は稻妻の如く、祖父の「逃げろ」の一言が全感覺をおそひ、即座に脱兎の如く桶を持つて小駒田指して逃げ出した。三十間も走つ

て後をふり返つて見たら、彼等は別に追つてこないものでほつと安心して歩き出した。胸を打つ心臓の音は激しい。兩方の耳はぼうとして遠くなつてゐた。

我田の上の三つの水揚げにはそれ／＼人が番をしてついでゐた。私はその人達に一々雨が降らなくて困ると挨拶をして通ふた。そして自分の田の水揚げの處にきて見たら、かなりじり水が溜まつてゐた。このじり水を桶で汲んで田に流んだなあ、と私は直感して、一先づ心臓の音を低くするため土堤の上にとつかと腰を下して休んだ。今日も鳥海山は見えてゐるが、然し日は平然と輝き、少しも日の圍りに雲で圓を作つてゐない。これを私の村では日に笠を被らぬから雨が降りさうもないと言つてゐる。あちこちの村々ではもうたまり兼ねてそろ／＼雨乞を初めてゐるらしく、太鼓や石油罐をドン、チャン、ドンチャン、と叩いて田圃や山畑を廻つてゐるらしい。田圃の雲雀はかうした人間界の出來事には頓着なく遠く天の彼方に嘲つてゐた。心臓の音もやつと納まつたので、私はぼち／＼水を桶に入れて汲み出した。

ガアブ……：ギャア……：ガアブ……：ギャア、と續げざまに二百も汲んだら、一先づ水はなくなつてゐた。然しこのじり水は掻けばかく程また出てくるといふ譬喩がある。さてこれから溜るまで、ゆつくり一眠りしよう、私は青草の土堤の上にごろりと横になり、手拭で目を被ふて眠り出した。(未完)

注

- (1) 鍬を立てる…鍬で畦畔を崩し、自分の家の田に水を引き入れる
- (2) ふと…人
- (3) 村のお宮…三嶋神社
- (4) おひでけだよ…教えてくれたよ
- (5) あべ…行くぞ
- (6) したたて…そうしたって
- (7) 水ふぎ…水引き
- (8) なが…お前
- (9) きひる…着せる
- (10) 寒風山…現在は「カンブウサン」と呼ばれる。吹き下ろす風が寒いことからこの名がついた。
- (11) こどら…子ども
- (12) どばらくそ悪い…にくたらしい
- (13) 三本の松…房枝氏の記憶にも残る松。現在は無い。
- (14) 水揚げ…ため池。以前は家ごとのため池があり、上流から下流までつながっていた。
- (15) けばいねが…こればいいではないか
- (16) 水の中にふぎじり落して…水の中に踏みつけ落として
- (17) ふとりで…ひとり
- (18) ばこな…ではないか
- (19) 脇本の野郎がた…ここだという脇本は、脇本駅南側にある集落の人々
- (20) ながばらもはつてけじや…お前も入って来い
- (21) いだわし…もつたいない
- (22) 上着…継ぎ当てをして、刺し子をした裏付きの衣
- (23) なもい…そんなことあろうか
- (24) まぐれい倒しがだめ…役位に立たない奴らめ
- (25) なんとしたあづだて…どうしたんだよ
- (26) てもどがた…あなたがた。親しい人を呼ぶ時に使う。
- (27) タカブグ…てんかん
- (28) かまねでおでもふとれして生きるでば…かまわないうおいても一人で生きられる
- (29) からびやみ…怠け者
- (30) 北海道に出稼…鯨漁に従事する者が多かった
- (31) なななだて…なんだって
- (32) 何時でもかつでもたらけて、けつがてひ…いつもいつも怠けしくさって
- (33) ごつさらし…恥さらし
- (34) はてるものひば…入っているものだから
- (35) よべな…昨夜
- (36) ただつてみだがも知らねで…崇っていたかもしれないぞ
- (37) おどちらねなあ…かわいそうだなあ
- (38) こんなじやましてなとする…こんな様してどうする
- (39) かまねで…かまわないで
- (40) はがみひ…我慢して
- (41) 良いいげどして…いい年をして
- (42) 癩の強い人…癩癩もち



(43) 村合ひ…村の役員

(44) 三百…大げさにものを言う人

(45) じり水…尻水